關西大學學報

大正十一年六月十五日創刊
昭和十五年九月十日印刷
昭和十五年九月十五日發行

編輯兼發行人　神鳥敬次郎
印刷所　大阪市北區堂島上三丁目十五番地　谷口印刷所
發行所　大阪市東淀川區大桐町三丁目十二番地　關西大學學報部

第一八二號目次

新體制國民組織に就て……正井敬次……（一）
東亞經濟の倫理……西田竹雄……（四）
興亞學生動労奉國隊に參加して……（七）
新刊紹介……（三）
歴代天皇御追號法……（四）
學内欄……（五）
校友欄……（六）

新體制國民組織に就て

專門部長
經濟學博士　正井敬次

一

近衛首相の聲明によつて政治の新體制に關する國民組織運動の指導精神が明かにせられた。いま茲に首相聲明の新體制の理念に即應して、この國民組織の問題について少しの省察を試みることにする。元より其は國民組織の政治的制度的性質の研究と云ふのではなく、一經濟學徒としての自分が國民組織について感ずる國民常識的の想念を申述ぶると云ふ程度のものに過ぎない。

首相聲明による國民組織とは「萬民翼賛の國民組織」のことであるが、それは如何なる國民組織であるかと云ふに、元來我國に於ては帝國憲法が之を明にするが如く總ての政治は　上御一人の大政に麗するのであつて、政府とか議會とかの機關が政治を行ふと云ふのは實は大政を翼賛し奉ることに他ならぬのであるが、いま國民の中の或る政黨政派とか少數權力者によつて構成せらるゝ所の議會とか政府に翼賛を專らにせしむることなく、國民全體が日常生活に於て翼賛の政治に參與することが出來ると云ふ組織を作るとき、それが萬民翼賛の國民組織である。即ち國民全體と云ふものが大政翼賛についての行動の主體となる場合の、斯の如き組織體のことを萬民翼賛の國民組織と云ふのである。さて右の如き國民組織の存在を具體的のものとすることが今日の我國に於て急務であることは云ふまでもないであらう。即も首相聲明にも言ふが如く、この世界的大動亂の渦中に於て東亞新秩序建設のための高度國防國家の體制を整へるためには、如何なる國策をも迅速强力に遂行し得るが如き國内體制を、政治經濟教育文化などのあらゆる領域に於て恒常的に樹立することが必要である。而して右の如き國内體制の基礎となるものは萬民翼賛の國民組織に他ならぬが故に、この國民組織の確立が今日の我國に於て必要なること言を俟たぬ。

二

然らば從來我國に於て國民組織と云ふものが存在せなかつたかと云ふに、必ずしもさうではない。ただそれが抽象的か或は觀念的な存在であつて、その組織體の構成が具體的な形で示されるに至らなかつたか、或は之を具體的な構成に考へる場合に於ても、それが未だ不完全なる構成であつたかの何れかである。例へば經濟學の方で、市民經濟とか市場經濟とか云はるる經濟は國民の個々の者が行ふ經濟の集合であり、租稅とか公債に關する經濟は國家經濟であり、市民經濟と國家經濟とを統合しての「くに」の經濟が國民經濟であるが、この「くに」の經濟を良くしやうとする國民經濟の運營は何者によつて行はれるのかと云ふと、それは國民全體がそれの主體であると考へられなければならぬ。即ち右の場合、國民經濟主體としての國民組織體が觀念せられてゐる。併しそうは考へても現實に我國に於て斯の如き國民組織體が何によつて其の具體的の姿を現はしてゐるかを說明することは困難であつた。他にも同樣の例が多く存在する、即ち「我々日本國民」がと云つて國民全體の意志より行動について語り合ふ場合、其處に國民全體と云ふものが觀念せられてゐるのであるが、その場合我々は必ずしも政府とか議會とかの機關のことを考へてゐない。左樣な現實の機關を問題となし得ない程に、「日本國民」がと云ふ場合

の全體的の意識は理想的抽象的である。この場合にも國民組織が未だ具體的なる形としては考へられてをらぬ。以上は國民組織が單に觀念的にのみ存在してゐたと云ふ場合である。

次に、國民組織は政府とか議會とか云ふ機關を通して行動する實在の組織體ではないか、と云ふ見方も勿論立つのであるが、この見方で行くとしても、其場合の國民組織は甚だ不完全なるものたるを免れないのである。自由主義的の政黨が分立する議會が國民意志の代表機關として立法について翼賛の政治に關與し、政府が國務の立案と執行に當るのであるが、政府が政黨分立的なる議會の支持を得なければならぬとすれば、政府の立案と執行は實は國民全體の支持を得るに困難な譯であり、從つて國務の遂行に種々の支障が生ずるのである。議會を國民意志の代表機關とし政府を其の執行機關とするならば、國民組織が一の組織體として行動する場合には、右二つの機關がぴつたりと息の合つたものでなければならぬ。然るに現實には議會と政府とは、ちぐはぐの二つの機關である。斯くしてそれ等が國民組織の機關であるとすれば、國民組織は統一せる機關を持たざる組織であり、從つて其は組織體としての行動を意の如くにとり得ざる組織であるが故に、不完全なる國民組織と云はねばならぬ。

觀念的なる國民組織を實在の組織體とし、不完全なる國民組織を完全なるものに仕上げること、それが今日の國民組織運動の理念である。然らば所謂新體制の國民組織は如何なる形に於て組織せられんとするのであるか、首相聲明は國民組織の內容と外形とを國民組織の目標と云ふ言葉の下に簡單に示してゐる。即ち曰く、「國民組織の目標は國家國民の總力を集結し一億同胞をして生きた一體として等しく大政翼賛の臣道を全ふせしむるにある、かかる目標達成には全國民が其の職場職場に於て翼賛の實を擧げ得るようにせねばならぬ、國民組織は日常生活に於て國家に奉仕する組織なるが故に、あらゆる國民生活の部門が縱に組織化せられ更に各種の組織を橫に結んで統合する全國的なる組織たるを要する、と。即ち右によつて國民組織の本質と外形とが示されるのであるが、右の終りの部分に云ふ組織の外形については遺からずして其の一層具體的の要綱が明かにせらるることと思ふ。

三

次には國民組織と個々の國民との關係を國民組織が經濟統制と云ふ政治について大政翼賛を行ふ場合について考へて見る。

新體制に於ては國民組織が大政翼賛に關する政治行動の主體となるのであるが、斯の如き行動の中には政治・經濟・教育・一般文化などのあらゆる部門の行爲が含まれる。但し誤解すべからざることは、政治・經濟などとして他のものと並べて云はるゝ場合の「政治」は狹き意味の政治であつて、其は主として國家及び國民組織の構成そのことに關する及び其等の機關相互間の關係についての國家及び國民組織の行爲を意味するものと考へられる。併し其他に於ても、經濟・教育などの向上發展に關する國民組織の計畫的指導的の行爲は總てこれ各部門の政治であると云はねばならぬ。即ち國民組織の立場に於ける大政翼賛は總てが政治である、その中に狹き意味の政治と廣義の政治とがある。經濟其他を國民組織の立場に於て行ふ場合、それ等は廣義の政治である。近頃往々に、新體制の下では經濟に對する政治の優位が認識せられなければならぬ、など云ふが如きことが有識者によつて言はれてゐるが、それは誤つた言ひ方である。國民組織と云ふ全體者の立場に於て經濟と云ふときは、それは前にも述べた「くに」の經濟を良くしようと云ふ「くに」全體の經濟の指導計畫の行爲そのことが經濟なのである。この意味の經濟はそれ自體に於て政治である、從つて國民組織の立場に於ける政治と經濟とには優位云々の問題は起らぬ。さればと云つて狹義の政治について廣義の政治に對する優位を問題となし得るものではないたゞ狹義の政治が先行する、即ち先づ國民組織の構成と行動の原則が定まらなければならぬ、と云ふことは云ひ得るであらう。何れにしても政治と經濟の關係は右の如きものであるが、いま國民組織の政治としての經濟は一般に統制經濟と云はれてゐるものがそれである。そこでいま國民組織と個々の國民との關係を考へる場合、政治の何かの部門に關しての右兩者の關係を問題とすることが便宜であるとすれば、經濟の統制と云ふ政治の部門についてそれを考へることが、今日の場合最も適切であるかと思ふ。

經濟の統制は、國民に國民組織の自覺が存在せざる場合即ち國民全體が國家國民のために大政翼賛を行ふのであるとの自覺が存在せざる場合、又は國民組織の構成が不完全であつて政府が國民組織の完全なる機關たり得ざる場合、從つて「くに」の經濟たる國民經濟は國民組織を主體とし而して政府を機關として運營（計畫指導）せられるのであると考へ又は云ふことが充分に出來ない場合、右の如き場合には統制は一般に外部の力によつての即ち上からの統制であり、從つてそれは强制であると考へられる。併し國民組織の自覺と構成が完全なるとき、統制は、國民組織自體が政府と云ふ機關を通じて國民組織自體が主體たるべき「くに」の經濟を統制するのであると考へられる。この場合經濟の統制は國民組織の「自己統制」である。かくして、新體制の下に於て國民組織の國民的自覺が一般的となり國民組織の構成が完成するものとすれば、新

體制の國民組織に就ては經濟の統制は上からの統制ではなくして自己統制であると云はねばならぬ。

然らば新體制の國民組織は經濟の統制を如何なる理念に基きて行ふか、この點に於て全體としての國民組織の個々の國民に對する關係が問題となる。國民組織に於ける經濟統制の理念は、端的に云へば經濟の均衡狀態の維持と國民所得分配の公正を其の目標とするにある。この點に關しては、從來の經濟學に於ける均衡理論が其の指導原理となるべきものと考へられる。但しこの指導原理を茲に詳說するの暇がない（雜誌「財政」十月號に此點を中心問題とする投稿掲載の筈）。併しいま假に右の原理に從つて企業の所得たる利潤と消費者の所得に對する統制の場合を問題とするときは、利潤の統制については、特に「くに」の富を增加せない普通の場合の利潤に關しては、企業者勞銀と利子の外に於ける純粹の企業利潤なるものが存在せざる程度に、强力なる利潤制限の方針をとるべきであり、眞の富の增加に貢獻せる企業の利潤については制限を寬大にすべきである。また消費者の所得に關しては消費者の實質所得ではなく實質所得に變動を生ぜしめざることを眼目として、統制が行はるべきである。以上の企業及び家計（消費者）の所得の統制は之を反面に於て見れば物價の統制を意味すること勿論である。即ち物價統制と云ふ側より見れば物價は企業の利潤及び家計の實質所得が上述の如き狀態になるやうに統制せらるべきである。

利潤の統制について更に一言を附加すれば、利潤には社會的關係に基きて普通に發生するものと物的關係に基きて特に發生するものとがある。社會的關係の利潤は多くの場合特別なる企業者の貢獻がなくして得らるゝ利潤である、其は企業の獨占的地位、企業相互間及び企業と家計との間に於けるかけ引とか欺瞞、價格の引上、商品の思惑賣買などによつて得らるゝ儲けである。右の如き場合、國民のある者の儲けは他の者の損失であるか不利益であるかである、其は眞の國富增加による利潤ではない。その場合、勿論企業者なり從業員は各自に生產的の活動をする、從つて彼等には充分の報酬が勞銀の名目にて與へらるべきである。併しながらその上の企業利潤はなくとも國民經濟的に非合理的であるとは云ひ得ないのである。企業者は働くために其の報酬を得ること勞働者と其の立場に於て同一である。企業者をして斯の如き職分意識を自覺せしめ而して上述の如き意味の利潤については其の大なる制限を至當のことゝ感ぜしむること、それが右に云ふ場合の利潤に對する統制の根本精神である。次に物的原因の利潤と云ふは生產技術上の發明發見、原料・製品に關する新市場の獲得と云ふが如き原因に基きて企業が得る利潤であるが、この場合眞の國富の增加がある、從つてその利潤は企業者が生產に關する貢獻によつて眞に報ほるべき報酬としての利潤である。蓋し新體制の國民組織は企業者に創意と建設による生產報國の企業意識を要請する、從つて右に云ふ場合の利潤については統制は寬容であつて然るべきである。

四

以上は國民組織と云ふ全體者と國民個人との關係を國民組織の側について見たるものであるが、次に國民個人の側よりして之を見れば如何であるか。蓋し新體制は、實在する者は個人であり其の集合が全體であると云ふが如くに、全體と個人との關係を原子論的に見る個人主義を廢棄することは勿論であるが、同時に其は、全體の前には個人は其の意義を失ふと云ふが如くに考へる全體主義をも揚棄する。即ち國民組織體制は、日本國民と云ふ特殊の歷史と精神を基本的に有する實在的の共同體に於て、同時に實在的なる成員としての個人の意義を認容する、統合主義的の組織體である。是に於てか、國民組織に於ける國民個人の立場の問題もまた其の意義に於て重要である。

國民組織に於ける個人の立場は、新體制に於ては、統合的の國民組織體の統制に即應すると云ふ點にある。即ち「公益優先」の生活倫理がそれである。元々新體制の國民組織と雖も其は帝國憲法の下に於ける組織である、然るは憲法は個人的なる所有權の自由を保證する、是に於てか公益優先については私益を如何にすべきやが問題となる。蓋し公益と私益の關係は目に見えたる又は積極的なる事柄については其の解決が容易である、例へば公債の買入と贅澤物の消費と其の何れを選ぶべきか、この場合の公益優先の倫理は子供にも分つてゐる。併し目に見えない消極的の行爲に關しての公益優先の倫理は案外に理解せられてゐないやうである。例へば企業者に於ける前述の社會的原因による利潤獲得の行爲は實は社會一般の公益を害してゐるのであるが、この場合斯の如き利潤獲得の行爲を自制することが、消極的に公益優先の意味となるのである。右の場合、企業者は從來の企業者勞銀としての自己の所得を護つて居ればよいのである、それで私益を侵される譯ではない。積極的に儲けようとするならば、眞に生產力の增大に貢獻するが如き、創業的の活動をすればよい、その場合その生產的事業は公益に一致する。消費者については、統制に服して消費を節約することとそれ自體が公益に合致する、それを先づ行ふことが消極的意義の公益優先である。右の如くに公益優先は其の消極的の場合について一層重要である。目に見えない所では大に不當の儲けをして、而して見えた所で澤山な國防獻金をする、と云つたことは公益優先の精神に反する。私益を自制することは困難であら

う、而して商工業者を總て俸給生活者の狀態にしてしまふことも困難であらう、況してや人をして總て聖者たらしめることは不可能であらう。併しながら、企業者なり一般消費者が大なる程度に於て、右の如き新體制の企業倫理と消費道德について覺醒せざる以上は、新體制國民組織の完成は困難である。

五

最後に一言、新體制の國民組織が萬民翼賛の國民組織たる所以の、國民組織の最高倫理について申述べる。

近衞首相の聲明は、國民組織確立のための運動は決して政黨運動ではなきこと從つて國民組織そのものも一の政黨でなきことを明かにしてゐる。而して我國政治の特質について次の如くに言つて居る、「わが國に於ては萬民ひとしく翼賛の責に任ずるのであつて一人もしくは一黨が權力によつて翼賛を獨占することは絶對に許されぬ、萬一翼賛の意思にをいて異るものありとすれば　聖斷に仰ぐべきであり一たび　聖斷の下されたる時はすべての臣僚が「承詔必謹」の大義に歸一することが日本政治の眞姿でなければならぬ」と。

既に本文の初めに國民組織が大政翼賛のための組織であることを申述べたのであるが、茲に更めて承詔必謹の大義を掲げてそれが國民組織の最高倫理を示すものたることを明かにする。蓋し「詔を承けては必ず謹め」と云ふは聖德太子憲法十七條の第三條に示された言葉である。抑もわが國體の明徵については、聖德太子憲法第十七條第一條の「和」を以て貴となすと云ふ和の精神が、國體の諸要素の總てを貫いて横に擴がる所の精神であつた。然るに今や國民組織の構成に關して「承詔必謹」の大義が其の最高倫理として示さるゝに至つた。かくして「和」の國たるわが國の國民組織構成の運動には聖德太子の政治改新の精神が流れてゐると云つてよいであらう。かの大化の改新は聖德太子の和の精神に基きて行はれしものと云はれてゐる。今日の國民組織運動は、例へば經濟組織に關して大化の改新の如き變革を試みんとするものではない。併しながら既に新體制運動を中外に發表せる今日に於ては、帝國憲法を基礎とする、前提に於ての、出來る限りの改新を全國民が協力して之を實行せざる以上は、世界に於ける我國の地位は必ずしも誇るに足るものたるを得ないであらう。

東亞經濟の倫理

校友　西田竹雄

日本軍の占領せる支那大陸の至る處へ「東亞建設新秩序」とデカ〳〵大書せる大看板が書かれてゐる。是は更に重慶政府が奥へ〳〵と追ひ込まれると同時、やがては全大陸を塗りつぶすことは明である。思ふに是がヘンキ代だけでも相當莫大な經費がかゝる。

今や世界は、羅馬帝國瓦解以來比類なき一大變革を爲しつゝある。世界地圖は刻々に變化し此の振古未曾有の氣運に對應して、絶叫される建設新秩序も目下歐洲を席卷しつゝある世界新秩序と相俟つて、益々意義あらしめてゐる。

今日、日本の政界も是に伴つて盛に變化激動を示しやがて新時代に對處する處の大方針が決定せられ、東亞建設新秩序はよりよく遂行せられるものと思ふ。然らば斯く叫ぶ基本的原理なるものは一體如何なる物か、理論か、思想か、それとも經濟か、何れに依つて新秩序を建設すべきかゞ問題である。勿論東亞に於ける國家と國家とが相互扶助、共存共榮であらねばならぬ、是が爲には有無相通じ、思想的にも理論的にも經濟的にも共に和平建國の爲に確固たる協同歩調を以て進み得るものを基本觀念或は基本原理として行かねばならぬ。

勿論是が基本觀念或は其の原理を發見し、是が實行に當つて指導するものは日本より他にない。此の指導者たる者の責任たるや重且つ大である。是が爲に吾國民のみならず當局者は日夜焦心苦慮するのは當然である。（以下四行畧）所謂重大聲明を連發して識者をして顰蹙せしめてゐる。或は是は新聞屋の罪かも知れないが、兎も角至難中の至難とも云ふべきもので、此の歴史的大事業に在つては無理なきことである。

其處で吾々は國家の一員であり當局者のみの仕事でもない國民全體が總動員をして、是が指導原理を發見せねばならない。世界に於ける東亞の任務と色々の素材を考究して、然る後に適確なる原理を發見しやうではないか。

此處一世紀の間に日本は歐米の文化を吸收して、立

派な文化國家を形成した。日本の立憲政體、生産工業は實に歐米人の驚嘆措く能はざる程進歩した。如何なる者も此の社會組織を見ては、何等言ふ處を知らない、學者然り、政治家は勿論のこと、實業家然り、國民をして追從以外に何等他の事を考へせしめない。處が悲しいことに吾日本の採り入れた文化なるものは純日本國體的國家を生かしたものでなく、デモクラシー國家の文化を濃厚に採り入れ、知らず知らずの中に國體はそうでもないが、歐米的國家が出來上つてしまつたのである。世界に祖國を持たないユダヤ人は、世界一賢明な頭腦の持主であつた。彼等は歐米文化を今日の如く立派な處にまで引上げた、政治組織には議會政治を採用した、生産工業も資本家の獨占的專斷的營利事業にしてしまつた。彼等には祖國がなく漠然たる世界國家を夢見て、純然たる國家を造らず、只世界各國に侵入して政治に參加し得る組織を作つた議會政治なる便宜政治組織に喰込んだ、國家を念頭に置かない政治が此處で行はれるやうになつた。利息生産的政策即コムミッション政策が世界の果々に至るまで行はれるに至つた。從つて一方には同樣に國家を念頭に置かない營利獨占的生産工業が政治を運行する軍資金の生産所として益々世界中に其の利息政策的生産工業が盛に行はれるに至つた、今日日本が經濟統制を盛にし、其の反面に於て闇取引が盛に行はれるに至つて、始めて闇取引の恐ろしきものであることを知つた。世界のユダヤ人は昔から闇取引が彼等の商賣である、如何なる取引にもコムミッション政策を採用してゐる。彼等は祖國がない爲に他國人否他民族をして利用し、墮落せしめ、ユダヤ人の思ふ通りに何事も出來得る樣に努めた。今日支那人の彼等から敎へられた商業道德なるものは即ちこのコムミッション政策で、其の半面に於てはスパイなしで商賣が出來ぬ樣な狀態である。政治でも然り彼等ユダヤ人は總てコムミッションと立派なスパイ政策を併用してゐる。是が爲に彼等は其の政策遂行が非常に上手である。これは餘談にして置いて、今日日本の政界や實業家の政策や營業を見るがよい。彼等の政治敎育はユダヤ人が始めた學問を土臺として研究し、彼等の貿易政策を實行し、彼等の生産工業政策を其儘實行して、資本を集中してゐる。從つて政治を爲す者と事業をなすものとが相互に非常な便宜がある。政黨政治は一體如何なる存在を意味するか、政黨を維持する者は誰か、國民全體があらねばならぬが、然らずして實業家である。政黨が如何に之を否定するも、實業家から手を切れば全く其の活動が出來ない。其處に必然的に發生するものは利益社會に於ける腐れ緣、切つても切れない腐れ緣である。例へば或る實業家が武器彈藥を製造するに必要なる軍需品を購入する爲に大藏省の許可を得て、日本金拾萬圓を以て米國爲替を獲得する者がありとせよ、日本內地で米弗一弗を買ふに要する日本金を四圓（事實は四圓以下）と假定せば拾萬圓にて貳萬五千弗の米弗が獲得出來る、米國で軍需品購入の爲に全部消費される場合は何等問題ではないが、若し其の實業家が深いユダヤ人の樣な慾心でもあれば其の半分にて材料を買ひ込み、殘り半分を米國銀行を通じて支那の銀行へ振替へ、支那にて貳萬五千弗の半分壹萬七千五百弗を日本軍票拾四圓（一ヶ月以前では拾八圓であつた）得られる爲に貳拾四萬五千圓となる、軍需品は內地で金になる從つて彼の儲けは買込んだ軍需品と拾四萬五千圓である。元金の拾萬圓は一度米國を經由すれば支那で四拾九萬圓と早變りし、其の中拾萬圓を支那から內地へ支拂決算をすれば、內地では帳面上支那へ拾萬圓軍需に立替へ支那から拾萬圓受入れたとして消してしまへば完全に拾萬圓の元で參拾九萬圓儲かる。同樣に斯の如き行爲を自由に否、合法的に爲し得る大會社銀行が幸ひに米國にも支那にも支店があるとすれば誰だつて一寸慾心を起さぬものはないでせう。處が悲しいことに爲替を買へばそれだけ米國に金を吸收されてしまふ、帳面面がプラス、マイナス零となつても日本の非常資金の莫大な數字は段々と消えて行くのである。是かカムフラージュし或は補充する爲に金鑛を血眼になつて搜査發見せねばならず、國民こそ全く泣面に蜂である。此等の爲替政策も全くユダヤ人の發明にかゝる世界經濟の實際であつて、あまり喜ばしき政策でもない、彼等は祖國を持たぬ國民であるから只私利私慾を滿せばよいのであるが日本國家にそうはならぬ、斷じいあつてはならぬ。處が斯の如き國民が日本にないと斷じて云へるでせうか、若しあるならば吾日本は既に私利私慾に左右されるユダヤ人の世界經濟政策の爲に遂に國家を亡ぼすであらう、まして斯樣な不純な金を何百萬圓、何千萬圓國家に獻金されたとしても、日本國家としては少しも有難くなく、反つて國家を益々貧困に推し進める。而して斯樣な實業家と結合せる政黨政治も是又國家をして危體に瀕せしめるものである。かつての內閣が所謂、淡雪內閣、不鮮明內閣、曖昧內閣、洞ヶ峠內閣、思案投首內閣と云はれる所以は此處にある。私利私慾から始まつたユダヤの經濟原論は日本の樣な國家には適合せぬ。純日本的國家觀念より出發した經濟あるのみであつてユダヤの世界經濟的獨占經濟は根本に於て個人經濟に過ぎぬものである。大體經濟の出發點を祖國なき者の經濟と日本の如き純國家的經濟を比較しよく考究せねばならぬ。

然らば今日流行の統制經濟は如何にと申すに、是もまた散財政策と同樣に、後の締括りが全くない。例へば今日大陸に實施されてゐる輸出入統制を見る

に、日本より輸出統制を通じて支那に輸入される物資は各種各業者の販賣消費能力に應じて分配支給され、是を一定の統制値段で一般に分配される。從つて必要品、不必要品でも何でも決定された上は必ず分配される。例へば石炭一噸八拾圓で毎月工場なり營業に必要な數量、百噸なら百噸配給されるとせば、中に夏季の爲或は生產材料不足の爲に使用せぬ石炭が澤山出來た場合、是を日本人に賣つては統制品の爲に賣値に一噸百圓なら百圓と統制されて、あまり儲からぬが、支那人、外人に賣る場合には百五十弗から貳百弗に賣れる。それは支那人、外人間では目下物資不足の爲に自由經濟である爲とで物品の値段が無茶苦茶に高い、從つて是が爲に一噸に就いて參拾弗（法幣一弗は約八十二錢）儲かるとせば百噸賣ることに依つて參千弗（約貳千四百六拾圓）儲かることになり從つて仕事せずに毎月配給さへ受ければ右から左へと金が手に入る。斯の如くにして石炭のみならず、建築材料、紡績材料其他必需品は總て儲かる爲に此處にも闇取引が横行してゐる。從つて和平建國の精神は何時しか消えて、興亞の虫とも云ふべきものが上下を通じて横行する。處で此等の配給を受ける者は營業許可ある者に限られ、許可を得られない大多數の人々はこの闇の利益を得ることが出來ないのである。更に又各自の資本に應じて分配される爲にどうしても資本家の手に多くの物資が在ることになり又しても是が分配獲得に競爭となり畢竟闇取引が行はれることゝなる。此處まで來ると、東亞建設新秩序はペンキ代と其の手間賃だけ損と云ふことになる。

統制經濟と云ふものは人爲的經濟であるから不完全をまぬがれぬことはなか〳〵困難であらうが、其れを實施して、果して圓滑に効果的に實證せられてゐるや否に關して實地に調査し、臨機應變的に處理せねばならぬ。是をなさずして、やりつぱなしにすると云ふことは無責任な統制である。和平建國を臺無にする恐れがある。斯の如く統制經濟をあやつるには其の者に自覺と訓練がなければならぬ。然らざれば必ず失敗することは明である。以上の如く何事を爲すにも國家的觀念がなくなる樣なことになるのは即ち其の指導者の自覺如何に依つて左右せられることが多いのである。更に歐米文化の樣な個人經濟の型の中では、心も自然と變化する。從つて東亞の指導者としての日本は先づ第一に確固不動の國家的觀念を必要とし、全體主義的型から去つて純日本式の型を建設する必要がある。一つの行爲にしても昔と今と、その判斷の形式が違ふ、以前はそれで善かつたが今日では悪いとなり、又個人的考究から社會的考究へと發展し、更に國家的考究へと進まねばならぬ。即ち一つの行爲にしても今日は國家的評價の基に善と認め得られるものでなくてはならぬ、是を判斷する爲には更に國民全般が自覺め自覺せねばならぬ。政府も實業家も一般人士も總てが國家的善に就き悪を捨てゝこそ今日の難局を打開することが出來ると同時に東亞建設新秩序も立派に遂行出來るものと思ふ。

即ち今日の社會は、昔日の如く自給自足的な社會と違つて、何うしても他人の經濟が直ちに自己の經濟に影響する。個人經濟から社會經濟、國家經濟へと發展する。國家經濟は場合により時によりて個人經濟を犧牲にせねばならぬ、即ち是が統制經濟の缺點でもあり特徴でもある。只々國家存亡の爲に吾人世界の新時代政策と對處して如何にすべきかゞ根本的に解決せられねばならぬ。次に東亞に永く新秩序を建設する爲には日本は是を如何に指導せねばならぬかゞ重大なる責任である。今日經濟は只數學的利息的經濟では當抵計算は出來ぬ、只營利主義的な個人經濟ではなく其處には國家意識が濃厚に織込まれた國家觀念から發足した經濟のみが許さるべきものである。彼の獨逸國家の今日あるが如き其の飛躍は、單なる經濟ではなく、血のにじみ出るやうな國家意識の總てゞあつた。即ち徹底せる國家の統制經濟であつた。

大陸に於ける日本人は如何に、領警が如何にやかましく言つても夜おそくまで飲み、待合、料理屋には朝まだきまで自家用或は○○マーク入りの自動車が所狭しとならべられてある。上に立つ者が上にある品位を以て下を指導せねばならぬものを、斯樣な狀態では如何に命令を嚴にしても實行は不可能になる。これが自己本位主義から來る國家組織の解體である。恐るべきものである。或る社會學の學說に依ると社會が文化發達するに從つて個々人の交渉が段々とうとくなり、自然に個人主義社會になると云ふ。まことに然り人々はあまりにも個人の利益を追求する爲に益々相離れ相去り遂には全體主義國家の如く國家社會の解體を自ら招くに至ることは必定である。恐るべきは國家組織の解體である。國家意識に基く總ての行爲は如何なる時如何なる場合にも失敗を招くことはない。

要するに東亞建設新秩序も、其の根本的原理は指導者なる日本國民の國家意識の盛んにして國家的善を遂行するか否かに決するものである。國家意識盛なれば國家經濟も充實し日本の東亞に於ける經濟も東亞の世界に於ける經濟も必ずや遂行出來る。此處に東亞經濟の倫理として是が新らしき日本の文化建設に一つの素材ともなり得れば幸甚の至りである。

筆者は昭和六年學部講師出身、此度大阪上海支局より北京支局に轉勤された。

興亞學生勤勞奉國隊に參加して

七月二十日神戸出帆以來一ヶ月半、北支、蒙疆方面に於て勤勞作業、戰跡見學を通じて幾多貴重なる體驗を得られて九月三日歸阪せられた、本學の參加隊員諸君に左の回答を求めた。

一、大陸に於て何を見、如何に感じたか

二、今後の大陸政策は

こゝに收錄したものはその回答の到着順であるが豫定の紙數をはるかに突破したので、編輯の都合上掲載出來なかつたものもあり、省略したものもあることをお斷りします。

○　指導教官　橋口丹後

文部省は今夏も興亞學生勤勞報國隊なるものを組織し學生生徒を大陸に派遣した、私も中隊附幹部の一員として本學園から傳拔された十五名の學生生徒と行を共にするの光榮を負つて月餘に亘り北支の地に汗し導き體驗と認識を深めることが出來た、今夢のやうなおぼろな回想中から浮んで來るものはいろ〳〵な感傷的な光景である、併しこれではいけない意識的な反省でなくてはいけない、もつと整理し秩序を與へねばならないと考へながらも此陸では學報局よりもとめられるまゝに『學生生徒を引率しての感想』のみに付き筆を染めることにした。

興亞學生勤勞報國隊を北支蒙疆に派遣する趣旨は全國學生生徒を傳拔して東亞大陸に派遣し現地に於て集團的勤勞教育を實施し身を以て東亞新秩序建設の事業に參加せしむると共に具に第一線將兵の勞苦を感得せしめて盡忠報國の精神を昂揚し大陸に對する認識を深化し堅忍持久の意力を錬成し相率ゐて興亞の大業を翼賛すべき學風の作興を期すためであつた。これを要約すれば統制ある團體行動によつて力强い集團精神を涵養し德性の基礎をなす規律服從を敎へ更に全體への奉仕により功利主義を克服して犧牲的精神に目覺めしめ奉仕の念を昂揚するのにある。

從つて學徒を統率し大陸に進出して之等學徒の訓練に從事する幹部の責は頗る重且つ大なるものがある。之等學徒は高等學府から選拔せる日本青年の最上優秀者にしてその行動は國運の將來を判定し得るものであるから各國人の注目する所である。特に中華民國人の心底に燭るゝもの甚大にして興亞成業の成否に影響するものがあらう、而も學徒は今尙修養途上にあり團體的行動に未熟であるのみならず體力の伴はぬものあるに拘はらずこれを氣候風土を異にし、腥風吹き荒ぶ大陸の曠野に派遣するものにして之が指導訓練に當るものゝ勞苦や察するに餘りあり、即ち幹部は團結を堅固にし訓練の中核となり責任を重んじ上下敬愛互に親和し恩威並に行ひ學徒と苦樂を共にし率先垂範に努め常に正道を踐み學徒の儀表となり本訓練に邁進するの覺悟がなければならない、蓋し指導者の實貫は實踐躬行を本旨とする勤勞奉仕にあつては頗る重要な意味を持つものであつて教職員學生の中から全部を率ゐる熱と力を持つ指導者によつて嚴格な規律と溢れる眞劍味を以つて趣旨の徹底に努めてこそ勤勞奉仕の眞精神が發揮されるものであるからである。

學徒統率の大眼目としては如上責任觀念、敬愛和親、恩威併行、苦樂同行、率先垂範の五項目を列擧したが訓練の目的は『臣道の確立』を主眼としこれがため滅私奉公統制ある團體訓練を第一義とし質實剛健の氣風の涵養を、次ぎに更に强健なる身體の錬成に著意して具體その目的達成に努めた、幸に各部隊長の慈愛適切なる指導と學生諸士の不斷の努力により好成績を以て終始し殊に或る方面からは『余く學生を見直した』とさへの讃辭を呈せられたことは誠に欣快に堪へなかつたところである。

唯學徒の選拔方法と學徒の眞摯さ加減に就ては猶一層注意する必要があらう、即學園から學生を選拔するに當つては文部省より割り當てられた定員を充たすを以て能事とせずその質の向上を計り眞に學園を代表する最上最優秀者を選定せねばならない、智識階級の前衛として學生層の擔ふ社會的意義の重大さを熟知し且つ剛健なる日本精神への反省の强き健全なる學生にして而も大陸への關心を持つものも選定條件の一となすべきである。

興亞學生勤勞報國隊員が北支に出發する時の壯行會

曾てマルキシズム全盛時優秀な學生の多くは之が研究に没頭しその理論的水準は一面的に偏してゐたが可成高かつた、マルキシズム流行の批評は自ら別個の問題であるが今の學生には當時の熱と活氣がなく眞摯さに缺けてゐるのではなからうか、從つて今度の場合に於ても北支學生派遣隊員としての心構へに缺けて居り種々調査研究を命ぜられても徒らに不平不滿の聲のみを發して仕事をしやうともせず結局何ものも掴み得ずして再び内地の土を踏んだものがなかつたらうか、少くとも學生の態度は總て批判的精神が漲り溢かれ惡かれ積極的で個人主義や享樂主義を斥け、滲透たる社會政策への情熱は小市民的な夢を打ち碎かねばならないのではあるまいか。

私達は興亜學生勤勞報國隊として積極的な使命を帶びて玄海を越え大陸に汗を流して來たのだから成程體驗は發表する事よりも嘗ろ之を自己の生活の中に活かす所に意義がある。又これが莫大の國帑を費して北支に學生を派遣した政府の恩義にも報ゆる道である、そこで私共は歸りの列車中に於て左の事項を誓約し實行方を決議した。

誓　約

一、東亜建設の盟主たる矜恃を持て
二、滅私奉公の精神を振起せよ
三、心身を鍛錬し詳衆心理或は艱難苦苦のため動ぜざる氣概を養へ
四、大に公衆道德を實踐し時弊を矯めよ
五、他人の批判より自己反省を先にせよ
六、物事の眞相を極めずして輕薄なる饒舌を用ふることを慎しめ

實施條項

一、毎朝學徒に下賜せられたる勅語拜讀の後體操を行ふこと
二、大原出發廿九日を記念とし皇軍慰問粗食反省日とすること
三、蒙鮮滿支人に對しては理解と同情とを以て接せよ
四、心身鍛錬は各自適宜の方法を以て行へ
五、將來相互の親睦啓發に關してはその方法を適任者を選びて之に委任す
六、以上誓約及實施條項貫徹のため會を組織し同行會（假稱）と名付けその内容等に關しては追つて指示す

今後年を重ねるに從ひ勤勞奉仕の國家的色彩が強くなりその國家による組織化が進展するのは必然の勢ひであらう、而して又事變後『大陸への關心』の昂大に伴ひ『勤勞奉仕』と『大陸への關心』の兩傾向の統一的現はれとしての動きが注目せられる、從來勤勞奉仕の目標が那邊にあるか不明の爲めに學生が趣旨の理解に苦しみ積極的協力の態度に缺ける傾きが見られたが目標が確立した上からは學生の理解を求めその共鳴を促進することが目前の急務である。

○　法文學部　鈴木謙二

一、今回我等學徒八百餘名炎暑の中を北支、蒙疆に進出し多くの體驗を經て二月振りに内地に歸つた、吾等大陸に上陸第一歩を踏みしめた時、何を見、何を感じたか！それは力强い大地の叫びだ、支那民衆の無言の中に叫ぶ新支那の復活である、日支事變は日支民族史上の一大痛恨事であり就中支那民衆は今次事變により極めて多くの困難を經驗した、即ち國民黨、共産軍の焦土戦術による諸公共機關、諸工場、建築物等の破壞、燒却又は農村に於ける食物の强制徵發、兵士の强制募集等々中華民衆は疲弊窮迫のどん底に落ちたのである。然るに日本軍占領後北支に於ては中華民國臨時政府、蒙疆には三自治政府並聯合委員會が生れ共産國民黨打倒、日滿支經濟ブロックの確立、それに伴ふ北支蒙疆の資源開發等の諸方策が行はれ今や北支並に蒙疆は新しい曙光に輝いて起ち上りつゝある、換言せば支那事變は「新東亜」創世の陣痛でもあり東亜永遠の安定を確保したと云へる、斯くの如く臨時政府、蒙疆聯合委員會、日本現地當局の指導、統制により復興しつゝある、北支、蒙疆の經濟の動き、政治的方策、支那民衆の現代思想、教育等々各部門に於て吾々は調査し又支那民衆の生活狀態、習慣及風習等一寸手に入らないやうな尊い參考資料や實觀等により或る程度細部に亘り調べ全部編纂し整理して持ち歸りたるを以て近日中に吾等隊員で各專門に再整理の上發表する筈である。

以上簡略に述べし如く今大陸は大地も人も自然も皆「新支那復活」を絶叫し、目指して進みつゝあるも此れ一は尊い血潮を流せし無敵皇軍の大きな援助と指導と犧牲的精神があつての事だ、第一線の將兵各位の御苦勞は實際眼の邊り見、又味つた、その苦勞は筆舌では眞實の感じを表すことは出來ぬ、體驗して始めて胸中にその勞苦の何物かを感ずる、吾等大陸に渡り見、又感じた事は「新大地の偉大なる復活力」と「陰となり新東亜建設に無言で務める皇軍勇士の汗とほこりの尊い香ひ」であつた。

二、所感で述べた如く今大陸は再復活に進むも未だ開發すべき餘地が多くある、政治、經濟等近代國家の一たらんとする支那には各部に亘り政策はあるが元來支那は大きな土地と多くの人口に惠まれて居る故自分の感じた大陸政策的農業即ち農村復興計畫である、事變後北支農村は戰禍、水害を度々受けて疲弊の極に達した、政府は我出先官憲の熱意ある協力を得て、農村應急對策を講じ（イ）難民の直接的救濟、（ロ）耕作の再開始を可能ならしめる如き諸種の援助、（ハ）治水工

作で現在此等農村救濟方策としては日華經濟協議の振興對策に併行して政府及省、縣各種機關に於ては宣撫班の愛護村工作、新民會の各縣指導工作等と合作して北支農業の全面的改良に乘り出して居るが今後一層各種工作に基き新支那の明朗農村を復興さす必要に迫られてゐる。

○　經商學部　尾崎林藏

一、北支の各所を特に山西に於て農村の狀況を見たのでありますが北支は物資が非常に豐富である事は衆知の通りで石炭、鐵等の地下資源は無盡藏と云つて過言ではない、そして然も良質であつて埋れは殺らでも出ると云つた調子であります、又棉花、煙草、阿片、或は小麥等は合作社の努力に依つて品種の改良增產が漸次實績を擧げて居ります、將來の增產は益々大いに可能である狀態です、斯くて治安の回復と共に此等地下資源の開發農產物資の增產に依り北支住民の大部分を占める農民生活の安定向上を爲さしめると共に增產せられた資源を日本工業の原料として輸出し日支經濟相互依存の關係を樹立し日支親善、引いては東亞新秩序建設の礎ともなるものです、然し今見る所では增產物資輸送の便が悪いことであります、自動車の少いのと道路が悪いのとで全く見るべきものがありません、鐵道は著しい復活を見せて居りますが未だしの感があります。

北支に於ける戰線は皇軍の占領せる豐富な物資の產地に對する敵の奪還せんとする攻擊に對する應戰で敵も此等豐富な產出地を手離すのが惜しいのです、それ故警備される皇軍將兵の御苦勞も亦大抵ではありません、鐵山、炭田等は未だ治安恢復の域を脱したとは云へません、內地で私達が北支はもう戰鬪も終つて平和であると思つてゐたことは非常な間違でした、此點から通て長期戰はこれからだと云はれる事がわかります。

體ふに國民の聖戰への理解と協力とは必須事で、益々有能國民の大陸への進出は必要です、又資源の開發農村の救濟增產、輸送能力の增大は今後も大陸政策の重要點であります。

北支は質に軍事、經濟上に於て重要な土地であり、支那の他の地に比して特殊性を有してゐます。

北支の興廢は今後我國勞の上に大きな影響を及ぼすでせう、それだけに現地に於て軍部の方の力の入れ方は非常なものであります。

二、我國民は支那の事情に通することが必要なのではないでせうか、その意味に於て私達は今回の機會を得た事は大なる喜びでありますと共に益此行動中に得た體驗を基に新秩序建設に協力致す覺悟で居ります。

○　經商學部　嶋田惠弘

一、吾人は前線將士の勞苦の有樣を實際に見聞し、銃後の者は一層其の固めを爲すことで而して第一線將士に對し常に感謝の誠を捧ぐるのみである、其の寸暇を割いて吾々隊員は絶大なる支援を受け實に勤勞奉仕の名も聊しく却つて奉仕されに來た樣であつた如く感じた、又集團勤勞作業に於て其の事が東亞新秩序建設の礎石ともなれば幸と思つて居る、爲したことは極僅かであつたけれども切に感する。

治安地に於て中國警備隊員は眞摯な態度で而も立派に教練を受けて居るのを見て新支那建設の氣魄充溢せるを見たのである、次に村民の知識思想傾向を調査せしに彼等農民は能く事變の眞體を弁へて居るのを認識して嬉しく思つた、農村甦生に努力しつゝある機關として先づ新民會、模範地區、合作社工作であらう、何れも東亞新秩序建設の外何物もないのである、一方軍管理工場を見學した、資源狀態は殆んど無盡藏と云へよう、最後新民會小學校見學の就學狀況を具に視察じてその日語熱に流石長期建設だなと思はしめた。

二、今後の大陸政策は所謂日、滿、支互助連環の精神を强調させる事にある、之所謂新民會が行つてゐる所である。

○　經商學部　田中喜久藏

一、大陸に於ける東亞新秩序が未だ前途暗澹なる事それは我々が歸還する日が遲れたと云ふ一事で想像される、我々が行つた所は支那では治安の良い北支山西省である、其處ですら如斯であるから中支、南支は云ふに及ばないであらう、況して支那全體としては今後早くて三十年を要するだらうと云はれて宜なるかなと感ず、各日系新民會員（元宣撫官）の非常に熱意ある而も張り切つた態度で東亞新秩序に日夜邁進せられる實例は枚擧に遑がない。

學生は體力を練る事が急務である、學問も大事だが體力だ此が最も痛感した事である、下略

二、眞に日華提携するに足るべき政策を確立する事即ち具體的に表現する事である、只抽象的にのみ述べると支那人は信用しない、そして日支有無相通じ相互に信じ合ふと云ふことは具體的なる方策の上に確立せらるべきであると信ずる。

○　大學豫科　白井雅勝

一、さて我々が彼の地に參りまして切實に感じました事は何と申しましても日本臣民としての有難さであります、上には畏れ多くも御慈愛深き天皇を戴いてゐる事であります、天皇の赤子であると云ふことであります、內地に於きましては機會ある毎に日本の有難さを耳がたこになる程聞かされましたが、今度支那に渡りましてはハッキリと日本に生れた有難さをしみ〳〵體驗致しました、これはとても筆舌には表はし得ない樣いものであります、日本を離れ、戰亂の地にさまよつた者のみが體得し得るものであります。「國亡びて

山河ありしとは海を一つ隔てた現在の支那を單的に云ひ表はした言葉であります、已れの國の爲政者は民の生活の保證も與へず山奥に逃げ込み民の生活の安定は外國なる日本の支配によつて漸く保たれ、胸には良民證たるものをぶらさげそれなくんば己の國でありながら自由に通行も出來ないとは全く我日本人の想像も出來ない事であります、これでどうして國家の有難さが味へるでせうか、そして純眞なる小學兒童は教室に於いて又戸外に於いて無心に愛國行進曲を高らかに唄つてゐます、それを聞く度に私の體は水でも浴びせられた樣に思はず身振ひしてしまひました、これ全く敗戰支那の悲哀にあらずして何でありませう、もし彼我の地位が顚倒してゐたならばと只日本の有難さに胸打たれるばかりでした。

戰爭にはどんなことがあつても勝たねばならない、敗けられない、此の儘兵を引き上げられない、たゞどこまでも勝つのみだ、全國民が眞に一致團結して戰に勝たねばならない、小さい不平は一切沈默を守らねばならない、學生は學生の本分がある、只默々と自己の所信に向つて邁進することこそ現在の我々にとつて國家に對する唯一の御奉公でありますと共に又我々自身の爲でもあるのです、此處に云ふ默々とは人造人間の如くあれと云ふ事ではありません、正しき言論は大いに吐き正しき行動を行へと云ふ事であります、事變は發まだ〳〵前途暗澹であります、內地に於て考へられる如く簡單に片附けられるものではありません、諸君東洋史をふりかへられよ、そこには元、清等の强力なる國家が支那を統一するに如何に長年月を費したかゞあり〳〵と解るではありませんか、彼等は百年、二百年の長い〳〵間かゝつてやつと支那を自己の掌中におさめ而して僅か數百年の後に滅びてゐるではありませんか、我々永遠の東洋平和、東洋新秩序を建設するには百年二百年否それ以上の長年月を費さなければ決して大陸の經營は期して望み得ないのであります、大陸の經營と申しましても搾取を目的とするものであつてはならないのであります、それは彼の歐米諸國の痛き懲劇なる帝國主義に外ならないのであります、我々はどこ迄も日支の提携による新秩序建設でなければならないのであります、單なる破壞を目的とし搾取を目的とする戰ならば直ぐに片附きもしませうが我々は破壞されたものを再び完全なるものに建設して行かねばならないのであります、一歩〳〵進まなければならないのであります、八紘一宇とは歐米諸國の如き帝國主義とは天地の如く全くその類を異にするものであります。「ヒットラー」がどうの「ムッソリーニ」がどうのと云つた所で我々が直面してゐる問題を早急に解釋し得ない事は火を見るより明らかな事であります、現地の將兵各位は眞劍に國家の爲に働いておられます。

併し戰はこれからだ、本當にこれからだ、どうしても此の事變を徹底的に完成しなければならない、有邪無邪にはすまされないのだ、我々はあやまれる優越觀を捨て、大陸の懷に飛びこんで行かなければならない青年よ立て、我々は溫室の花である時代は過ぎた、大陸を凝視せよ。

二、今後の大陸政策は何と申しましても優秀なる人を大陸にどし〳〵送り出すべきであらうと思ひます、そして先づ第一に國民の八割を占めると云はれる農民生活の安定を計る事が急務であります、卽ち農業技術の改善、種子の改良、水利の利用、河川の改築、植林等が現今支那が要望してゐる事柄であります、古來河を治めるものは天下をとる、と云はれて人民から親しまれたものでありますが、河川を改築した所で山に一本の木もなければ河川は到底治められないのであります從つて山に木を植ゑる事こそ現今の最も急務の一つであらうと信じます。

又支那をもつとまとまつた國家に仕上げる爲には少くとも北支、中支、南支の三部に分けてそれ〳〵獨立せる政權を樹立すべきではないでせうか。

○　專門部　鳥羽良雄

一、我々が見て來た所が事實なら、北支の治安がよくないと云ふことです。

二、大陸政策は更も角現地に於ける善政作戰こそは眞の事變解決政策であります、今は躊躇すべき時でなく行動すべき時代であります、認識と行動とを一體として新東亞建設に邁進すべきです。

○　專門部　岡本修三

感激湧き上る胸躍らせつゝ勇奮の意氣高らかに滿洲上陸以來約一ケ月餘我等が燃ゆる眼に捕捉し得し大陸の事實によりて我等の前には幾多大いなる問題が提供されたり。それは唯安逸的生活をのみ貪りつゝありし內地の生活よりして推測し想像したりし大陸への認識との間に大いなる懸隔ある事或ひは生活態度の反省によりて生ずる猛烈なる國民的良心の苛責等我等が魂の深奥に未だ曾つて無き衝撃を與へられ勃然として熱血の湧るを覺ゆ。今筆執りて其の興奮を率直に吐露せんとするも、そを一々詳說する遑なし。こゝに一二の事項を擧げて所感の一端を披瀝せんとす。

大陸に歩を印して到る處にて痛感せし最も重大なる事は、皇軍占領地域に於ける治安の確立に對する我等の確量の全面的訂正なり。今春三月汪氏を主席とせる中華新中央政府成立以來東亞秩序の建設は驀進的の勢を以て進歩し、今夏阿部、汪兩氏會談による日支條約の案文妥結なりたりとはいふも、これこそ前途程遠い大事業への道程の端初たるに過ぎず、而るに內地に於てはこれを以て支那事變終局に近づきたりの感を抱き

て心を安んずるの寡少からぬは否定し得ざる事實なり。されどこれは偏めて皮相の論議にして、現地の實狀を見、更に事變の本質的考究に徹せばその態度に大いなる根本的誤謬あるを發見すべし。而して我等に與へられたる大問題は實に此に存す。

我等第一線に在りて皇軍勇士の辛勞を目のあたり見る事旬日餘、聞けば最近內地よりの慰問品の戰地に到着する數は事變勃發當初と比して甚だしく減少せりといふ。この一事に徵しても國民の銃後より戰線への熱誠の日增しに稀薄になり、更にいへば事變解決への道の堅き決意と熱意との次第に頓座の形に變りゆく事實をまざ〳〵と眼前に暴露さるゝを見るにあらずや。

銃後にある國民はよろしく自戒せざる可らず。殊に國民の中堅をなす青年層特に我等學生こそ眞に聖戰の意義を理解し、皇軍將士の勞苦を想望し、ひいては更に現地治安の未だ確立せざる事實を十二分に承知して自己の生活態度に一大變改をなさざる可らず。

我等大陸より歸りてこゝに又銃後の國民として社會相を見るに、近衞公を主班として、新體制運動擡頭し東亞否世界の實狀に則して凡ゆる方面に一大變革が成されつゝあり、眞に痛快にたえず。されどかゝる社會制度の下、國民的自覺によりて國民のたゆべき勞苦は皇軍將士の奮鬪を思ひ辛苦を偲びては極めて當然の事たるに過ぎず、そこに何等の束縛感も存し得ざるなり宜ろしく質實剛健の風を振作し、輕薄なりしが爲に悔を千載に殘せし佛國の轍を踏まざる樣一大決心を成さざる可らず。

而して更に現地に於ける治安不確立の現狀をみては我等徒然としてこれを靜觀する事能はず、大いに我が邦人の大陸發展を促進すべく、大努力を拂はざる可らず。それが爲には先づ先決問題として小國民乃至は青年層に亘りて、大陸の認識を深めるべく、而してその爲の十全な用意の下に萬遺漏なき教育を實施す可きなり。彼の地に活躍すべき人士として十二分なる識見と才能を有する卓拔の士を育成し、彼の地をして現代の文化水準に一日も早く達せしむべきは社會の指導者たる者の特に努む可き大事なり。

驀進三ケ年そは我が國にとりても、新中國にとりても一忍苦而も希望に燃えつゝ戰ひ拔きし、雄圖の三ケ年なり、而も我が皇軍の崇高大慈の精神と將又微動だもせざる偉大なる實力とを、眞に理解し暗き迷夢より覺醒せざる限りこの聖なる戰は永久に續くべし、我等は如何なる艱難をも突破し進んで障害を排除し新生中國民と相携へこの世界史的偉業「東亞新秩序」の完成を成就すべく最後迄協力一致突進せざる可らざるなり。

二、我等大陸に臨みて孜々として倦まざる努力の下に建設又建設、着々と而も遂道の彼岸に到達すべく續け成されつゝある大事業を眼のあたりみて若き胸奥にそゞろ感慨深く印せられし幾多の事實は我等の進む可き前途に少からぬ示唆を與へられたり。

今我が日本は

是一ニ中華民國ノ反省ヲ促シ、遠ニ東亞ノ平和ヲ確立セントスルニ外ナラス

と仰せられし聖旨を奉體して輝く大御稜威の下東亞新秩序建設の爲に舉國一致その總力を傾注して戰ひつゝあり。我等將來の日本を背負ひて立つもの豈徒らに茫然の態をなし得んや、振ふべし今ぞ立ちて未だ東亞の各所に介在せる敵性を更に又舊秩序をば一時も早く驅逐すべきなり。

今や支那事變を契機として北支は日滿支經濟の一環に包含され、その有機的連繫と相互依存性を運命づけらるゝ事例を揚げ、今後に於ける大陸政策に關して感ぜし事を述べん。

北支が重工業原料として最も緊要なる石炭の豐富なる供給地たる事に於て、其の壓倒的重要性を有せる事は今更多言を要せざるなり、日本經濟は現在所謂戰時經濟體制確立の爲、急速度にその產業の編成替を强行しつゝあり。即ち輕工業に對する重工業の著しき低位と重工業原料の貧困てふ構造的脆弱性をば打破し、その產業的體制を全體的に調整しつゝあれど、この點に於いて是等重工業の資源は量的或ひは質的にも極めて重要なる點に於て日本經濟の期待は一段と大となる所以なり、實に北支に於ける石炭こそは日滿支生產力擴充計畫遂行上の重點にして之が開發は現に集中的努力が拂はれつゝあるも、東亞經濟確立の根幹をなすべきものなり。

次に或は又輕工業原料供給地としての北支を考ふるも、その將來には多大の期待がかけらるべく、棉花、麻、羊毛等日本の纖維工業の豐富なる供給源泉をなすものなり、斯くて我が輕工業原料の甚しき海外市場依存性は漸次減少し自給自足への道に拍車がかけられつゝあり、殊に將來最も刮目されつゝある棉花の增產には、日滿支共に協力し成す所あらざる可らざるなり。

日滿支經濟ブロックはこれを日本の側より見るとき第一に國防資源の確保なると共に日本の平和產業品の市場獲得なり、又後より見れば第三國の搾取より脫却王道樂土の建設なる事は今更言を俟たず、北支の豐富なる埋藏資源は充分右の如き日滿支經濟ブロックの期待に添ふならん、而して又八紘一宇の日本建國の大理想の具現たる東亞新秩序は外第三國の搾取、內軍閥の壓政に苦しみ來たりし北支一億の民衆に眞の平和と繁榮をば齎すべきは、必然の事なるべし。

東亞には今や亞細亞民族の黎明の鐘が音高く打ち鳴らされたり、清らかな曉のしゞまの中に息吹く我等東亞の民こそ來るべき世に全世界の民に采配を振ふべきものなり。

山河ありしとは海を一つ隔てた現在の支那を単的に云ひ表はした言葉であります、已れの國の爲政者は民の生活の保證も與へず山奥に逃げ込み民の生活の安定は外國たる日本の支配によつて漸く保たれ、胸には良民證なるものをぶらさげそれなくんば己の國でありながら自由に通行も出來ないとは全く我日本人の想像も出來ない事であります、これでどうして國家の有難さが味へるでせうか、そして純眞なる小學兒童は教室に於いて又戸外に於いて無心に愛國行進曲を高らかに唄つてゐます、それを聞く度に私の體は水でも浴びせられた樣に思はず身振ひしてしまひました、これ全く敗戰支那の悲哀にあらずして何でありませう、もし彼我の地位が顚倒してゐたならばと只日本の有難さに胸打たれるばかりでした。

戰爭にはどんなことがあつても勝たねばならない、敗けられない、此の雌兵を引き上げられない、たゞどこまでも勝つのみだ、全國民が眞に一致團結して戰に勝たねばならない、小さい不平は一切沈默を守らねばならない、學生は學生の本分がある、只默々と自己の所信に向つて邁進することこそ現在の我々にとつて國家に對する唯一の御奉公でありますと共に又我々自身の爲でもあるのです、此處に云ふ默々とは人造人間の如くあれと云ふ事ではありません、正しき言論は大いに吐き正しき行動を行へと云ふ事であります、事變は猶まだ〳〵前途遼遠であります、內地に於て考へられる如く簡單に片附けられるものではありません、諸君東洋史をふりかへられよ、そこには元、清等の强力なる國家が支那を統一するに如何に長年月を費したかあり〳〵と解るではありませんか、彼等は百年、二百年の長い〳〵間かゝつてやつと支那を自己の掌中におさめ而して僅か數百年の後に滅びてゐるではありませんか、我々永遠の東洋平和、東洋新秩序を建設するには百年二百年否それ以上の長年月を費さなければ決して大陸の經營は期して望み得ないのであります、大陸の經營と申しましても搾取を目的とするものであつてはならないのであります、それは彼の歐米諸國の如き惡辣なる帝國主義に外ならないのであります、我々はどこ迄も日支の提携による新秩序建設でなければならないのであります、單なる破壞を目的とし搾取を目的とする戰ならば直ぐに片附きもしませうが我々は破壞されたものを再び完全なるものに建設して行かねばならないのであります、一歩〳〵進まなければならないのであります、八紘一宇とは歐米諸國の如き帝國主義とは天地の如く全くその類を異にするものであります。「ヒットラー」がどうの「ムッソリーニ」がどうのと云つた所で我々が直面してゐる問題を早急に解釋し得ない事は火を見るより明らかな事であります、現地の將兵各位は眞劍に國家の爲に働いておられます。

併し戰はこれからだ、本當にこれからだ、どうしても此の事變を徹底的に完成しなければならない、有邪無邪にはすまされないのだ、我々はあやまれる優越觀を捨てゝ大陸の懷に飛びこんで行かなければならない青年よ立て、我々は溫室の花である時代は過ぎた、大陸を凝視せよ。

二、今後の大陸政策は何と申しましても優秀なる人を大陸にどし〳〵送り出すべきであらうと思ひます、そして先づ第一に國民の八割を占めると云はれる農民生活の安定を計る事が急務であります、卽ち農業技術の改善、種子の改良、水利の利用、河川の改築、植林等が現今支那が要望してゐる事柄であります、古來河を治めるものは天下をとる、と云はれて人民から親しまれたものでありますが、河川を改築した所で山に一本の木もなければ河川は到底治められないのであります從つて山に木を植ゑる事こそ現今の最も急務の一つであらうと信じます。

又支那をもつとまとまつた國家に仕上げる爲には少くとも北支、中支、南支の三部に分けてそれ〴〵獨立せる政權を樹立すべきではないでせうか。

○　專門部　島羽良雄

一、我々が見て來た所が事實なら、北支の治安がよくないと云ふことです。

二、大陸政策は兎も角現地に於ける治政作戰こそは眞の事變解決政策であります、今は躊躇すべき時でなく行動すべき時代であります、認識と行動とを一體として新東亞建設に邁進すべきです。

○　專門部　岡本修三

感激溢れ上る躍躍たる青年の意氣高らかに雄飛上陸以來約一ヶ月餘我等が繼ゐる暇に捕捉し得し大陸の事實によりて我等の前には幾多大いなる問題が提供されたり。そは唯安逸的生活をのみ貪りつゝありし內地の生活よりして推測し想像したりし大陸への認識との間に大いなる懸隔ある事或ひは生活態度の反省によりて生ずる猛烈なる國民的良心の苛責等我等が魂の深奥に未だ曾つて無き衝撃を與へられ勃然として熱血の湧るを覺ゆ。今茲眞りて其の與奪を率直に吐露せんとするも、そを一々詳說する遑なし。こゝに一二の事項を擧げて所感の一端を披瀝せんとす。

大陸に歩を印して到る處にて痛感せし最も重大なる事は、皇軍占領地域に於ける治安の確立に對する我等の推量の全面的訂正なり。今春三月汪氏を主席とせる中華新中央政府成立以來東亞秩序の建設は着實的の勢を以て進歩し、今夏阿部、汪兩氏會談による日支條約の案文妥結なりたりとはいふも、これこそ前途程遠い大事業への道程の端初たるに過ぎず、而るに內地に於てはこれを以て支那事變終局に近づきたりの感を抱き

て心を安んずるの寧少からぬは否定し得ざる事實なり。されどこれは極めて皮相の論議にして、現地の實狀を見、更に事變の本質的考究に徹せばその態度に大いなる根本的誤謬あるを發見すべし。而して我等に與へられたる大問題は實に此に存す。

我等第一線に在りて皇軍勇士の辛勞を目のあたり見る事旬日餘、聞けば最近內地よりの慰問品の戰地に到着する數は事變勃發當初と比して甚だしく減少せりといふ。この一事に徵しても國民の銃後より戰線への熱誠の日增しに稀薄になり、更にいへば事變解決への道の堅き決意と熱意との次第に頓座の形に變りゆく事實をまざ〳〵と眼前に暴露さるゝを見るにあらずや。

銃後にある國民はよろしく自戒せざる可らず。殊に國民の中堅をなす青年層特に我等學生こそ眞に聖戰の意義を理解し、皇軍將士の勞苦を想望し、ひいては更に現地治安の未だ確立せざる事實を十二分に承知して自己の生活態度に一大變改をなさざる可らず。

我等大陸より歸りてこゝに又銃後の國民として社會相を見るに、近衞公を主班として、新體制運動擡頭し東亞否世界の實狀に則して凡ゆる方面に一大變革が成されつゝあり、眞に痛快にたえず。されどかゝる社會制度の下、國民的自覺によりて國民のたゆべき勞苦は皇軍將士の奮鬪を思ひ辛苦を偲びては極めて當然の事たるに過ぎず、そこに何等の束縛感も存し得ざるなり宜ろしく實質剛健の風を振作し、輕薄なりしが爲に悔を千載に殘せし佛國の轍を踏まざる樣一大決心を成さざる可らず。

而して更に現地に於ける治安不確立の現狀をみては我等徒然としてこれを靜觀する事能はず、大いに我が邦人の大陸發展を促進すべく、大努力を拂はざる可らず。それが爲には先づ先決問題として小國民乃至は青年層に亘りて、大陸の認識を深めるべく、而してその爲の十全な用意の下に萬遺漏なき教育を實施す可きなり。彼の地に活躍すべき人士として十二分なる識見と才能を有する卓拔の士を育成し、彼の地をして現代の文化水準に一日も早く達せしむべきは社會の指導者たる者の特に努む可き大事なり。

驀進三ケ年そは我が國にとりても、新中國にとりても一忍苦而も希望に燃えつゝ戰ひ拔きし、雄鬪の三ケ年なり、而も我が皇軍の崇高大慈の精神と將又微動だもせざる偉大なる實力とを、眞に理解し暗き迷夢より覺醒せざる限りこの聖なる戰は永久に續くべし、我等は如何なる艱難をも突破し進んで障害を排除し新生中國民と相携へこの世界史的偉業「東亞新秩序」の完成を成就すべく最後迄協力一致突進せざる可らざるなり。

二、我等大陸に臨みて孜々として倦まざる努力の下に建設又建設、着々と而も遼遠の彼岸に到達すべく續け成されつゝある大事業を眼のあたりみて若き胸臺にそゞろ感慨深く印せられし幾多の事實は我等の進む可き前途に少からぬ示唆を與へられたり。

今我が日本は

是一ニ中華民國ノ反省ヲ促シ、遠ニ東亞ノ平和ヲ確立セントスルニ外ナラス

と仰せられし聖旨を奉體して輝く大御稜威の下東亞新秩序建設の爲に舉國一致その總力を傾注して戰ひつゝあり。我等將來の日本を背負ひて立つもの豈徒らに茫然の態をなし得んや、振ふべし今ぞ立ちて未だ東亞の各所に介在せる敵性を更に又舊秩序をば一時も早く驅逐すべきなり。

今や支那事變を契機として北支は日滿支經濟の一環に包含され、その有機的連繫と相互依存性を運命づけらるゝ事例を揚げ、今後に於ける大陸政策に關して感ぜし事を述べん。

北支が重工業原料として最も緊要なる石炭の豐富なる供給地たる事に於て、其の歷例的重要性を有せる事は今更多言を要せざるなり、日本經濟は現在所謂戰時經濟體制確立の爲、急速度にその產業の編成替を强行しつゝあり。卽ち輕工業に對する重工業の著しき低位と重工業原料の貧困てふ構造的脆弱性をば打破し、その產業的體制を全體的に調整しつゝあれど、この點に於いて是等重工業の資源は量的或ひは質的にも極めて憂慮なる點に於て日本經濟の期待は一段と大となる所以なり、實に北支に於ける石炭こそは日滿支生產力擴充計畫遂行上の重點にして之が開發は現に集中的努力が拂はれつゝあるも、東亞經濟確立の根幹をなすべきものなり。

次に或は又輕工業原料供給地としての北支を考ふるも、その將來には多大の期待がかけらるべく、棉花、麻、羊毛等日本の纖維工業の豐富なる供給源泉をなすものなり、斯くて我が輕工業原料の甚しき海外市場依存性は漸次減少し自給自足への道に拍車がかけられつゝあり、殊に將來最も刮目されつゝある棉花の增產には、日滿支共に協力し成す所あらざる可らざるなり。

日滿支經濟ブロックはこれを日本の側より見るとき第一に國防資源の確保なると共に日本の平和產業品の市場獲得なり、又後より見れば第三國の搾取よりの脫却王道樂土の建設なる事は今更言を俟たず、北支の豐富なる埋藏資源は充分右の如き日滿支經濟ブロックの期待に添ふならん、而して又八紘一宇の日本建國の大理想の具現たる東亞新秩序は外第三國の搾取、內軍閥の壓政に苦しみ來たりし北支一億の民衆に眞の平和と繁榮をば齎すべきは、必然の事なるべし。

東亞には今や亞細亞民族の黎明の鐘が音高く打ち鳴らされたり、淸らかな曉のしゞまの中に息吹く我等東亞の民こそ來るべき世に全世界の民に采配を振ふべきものなり。

新刊書架から

〃本を讀む人は多いけれども讀んで考へる人は稀である。考へる爲に讀む人は一層稀である。讀書は卽ち思考だと勘違ひしてゐる人間で書店の店額は雜踏する〃

西田幾太郎著〃日本文化の問題〃　岩波新書

一昨春、京大の月曜文化講義に於て、著者は標題の問題を提へて講壇に立たれたが、今新に岩波新書に加へられた本書は、昨年博士が此講演に多小の訂正の筆を加へられたものに、昭和十二年文部省教學局主催の下に日比谷公會堂で試みられた博士の講演「學問的方法」を加へたものから成立つてゐる。

日本文化とは如何なるものであり、日本精神とは何ぞや？近來この問題程やかましく云ひたてられてゐる問題はない、それにも不拘、この問題は極めて困難である。吾々は昔からこの中に生れ、それに生き、此處からものを見たし又行つて來た。それを把握することの困難さは自ら呼吸してゐる空氣の存在を意識する困難さにも等しいと言ひ得るからである。

× ×

著者は此問題に適格なる解明を與へるために先づ東洋文化の本質を決定される。卽ち東洋文化の特質は物の眞質に徹するところにあり、そこに創造の生があり眞質の生がある。併しそれが一つの生活態度たるに止まることなく、その論理が窮明されなければならない。古來西洋の論理は物を對象とするに反して東洋の論理は心を對象としてゐるが、然しその物及び心は何れも歷史的事物（歷史的現實）であるから、東洋文化、したがつて日本文化を明らかにするためには結局歷史的事物の論理を究明しなければならない。それで歷史的事物卽ち歷史的現實とは如何なるものであるか。歷史的現實の世界は多と一との矛盾が相卽して不離であること、卽ちかゝる矛盾的自己同一の場所であり、それは並列と對立との原理である空間と、融合と統一との原理である時間との相卽であり、環境的多と主體の全體的一との辨証法的自同である。從つて一卽多の絕對矛盾の自己同一の自己限定として表現的に自己を形成するのが歷史的現實の眞相である。かゝる世界の自己表現としてかような矛盾的自己同一を映し出すものが身體であり、社會或は種乃至はイデアと云ふ如き何れもかゝる世界の自己限定として生れる。

文化とはその根本的意味に於てはかゝる歷史的世界の自己形成としてそこに人間そのものが成立することである。新しき人間が形成され、新しき人間の種が生れるところに文化の發展はある。そしてかような主體が環境を限定し、逆に環境が主體を限定し、個物的多と全體的一との矛盾的自己同一として世界そのものがこのやうに作られたものから作るものへとイデア的にみずからを形成して行く、それが人間の種的活動としての文化的活動なのである。文化はさまゞ〳〵であつてもその根本に於てはかゝる一卽多の世界の動的構造をその原型としてゐる。唯かような原構造の重心の相違に依つて環境から主體へと云ふ方向と主體から環境へと云ふ方向とが對立的に現はれ、前者は西洋文化の特色となり、後者は東洋文化の特質と爲してゐる。

× ×

かような東洋文化の特質に徹するところに日本文化の本質があり、それは歷史的現實のうちに自らを沒入することである。そしてこゝから日本文化に於ける理よりも事と云ふ特質が成立して來る。それは又事理の一致であり、寧ろ事と無礙と言ふことが著しき其本質

陣中吟

津田正男

長歌鹽昆布一首並反歌二首

かぐはしき　蕗煮込みたる　鹽昆布が　こゝだ屆きぬ　はゝそはの　はゝのみことが　はしきやしまな子已れの　みいくさに　從ふかめに　朝夕やひるや如何にと　むらぎもの　心痛めて　ひねもすを　厨邊に立ち　こをろこをろ　攪き立てながら　煮給ひし　蕗こそこれと　若草の　妻は言ひきぬ　蕗ざみ　昆布切る手には　我が子供　三つ四つなるが　左より　右よりもつれ　そを煮ると　立たしゝ時に　背に負ひて　外にこそ出よと　幼きは　むづかりつらむ　そを容るゝ　器ありやと　妻にこそ　問ひ給ひけめ　蕗かめば　蕗ほかぐはし　湯そゝげば　昆布とろけゆく　こゝだくの　鹽昆布もて　心樂しも

反　歌

はゝそはの母のみことがつくらしゝ鹽昆布なればこゝだ尊し

幼きが牛乳に混せ飲み居りし滋養糖の罐は蕗の容器（モノ）

作者津田正男君は、專門部國漢三年在學中昭和十二年十月應召、中支の戰線〇〇隊長として活躍されてゐる、こゝに掲載の長歌並に反歌は最近に寄せられたものである。

的性格となつてゐる。華嚴や天臺の複雜な哲學思想の我國に於ける實踐化の如きもこの精神の發揮であり、俳句のもかような環境に於て生れた。

眞に物となつて考へ、物となつて行ふと云ふこの道は、日本に於ては儒教に於ける如く聖人の教として固定化されてゐない、それは現實の歴史的世界の中から聞かれる言葉であり、神ながらの道はこゝに成立する。無心と云ひ自然法爾と云ふのもかような意味に於て物の眞實に徹し行くことに他ならない。眞の學問的精神も又この同じ道に於て成立する眞に科學的と云ふことは物の眞實に行くこと以外にはあり得ない、それを歪曲するが如きは日本精神ではない。

日本精神はかようにしてその文化を建設して來た。われ〳〵に於ける文化に主體と環境との矛盾的自己同一を其原型とし、かゝる意味に於て歴史的世界の自己限定として成立、發展するのであるが、而も我々は其重心の相違に依つてかくの如く縱の世界文化と横の世界文化とも言ふべき對立を見出すことが出來る。而して今日我國はその縱の世界性を維持したまゝで更に自らを横の世界性に擴大すべく歴史的世界そのものから呼び出されてゐるのである。日本精神の發揮はそれ故に却つて世界として他の主體を包むことでなくてはならない。日本の今日の使命は東亞の建設にある。このことは上の如くにしてみずから他の主體を包み主體的の自己と他との矛盾的自己同一として歴史的公共的なる事物に於て互に結合する如き世界を形作ることによりてのみ初めて正しく成就され得べきであるとは云はねばならない。

日本文化は東洋文化として主體的であることを共通的性格としつゝ、しかも主體受容的であり、自然に對してもこれに對立しつゝ而も親和的である。かくして日本文化は主體即ち環境、人間即ち自然として、かくの如き矛盾自己の同一として發展し、こゝに歴史的世界が成立した。こゝに日本精神が印度の大乘佛教の精神に相通じ、神ながらの道が支那の天人合一の自然の道とも相通じ、却つて其徹底である趣きがあるのである。東亞協同體の建設に日本が主動的役割を演じ得べき根據も恐らく茲に横たはつてゐることを吾々は汲み取らなければならない。而も日本文化はかゝる東洋的基本的特質の上に理から事へと徹して行く固有の性格を有してゐる、この點に於てもまた我々は日本民族の東亞建設に對する實踐性を見出すところが出來る。

× ×

次に日本精神のかような特質は特にまた國體に於て著しき結晶を示してゐる、全體的一としての世界は日本歴史に於て常に變化して來た。併し我國にはかくの如き歴史的主體的なるものを更に超克する一層高きものがあつた。しかもその最高のものはかような「主體的一と個物的多との矛盾的自己同一として自己自身を限定する世界の位置」にあつた。歴史的主體的なるものはかような世界の自己限定としての種としての社會であり、かゝる歴史的種は「自己自身を否定して世界となることによつて自己自身が生きる」のであつた。我國に於ては支那に於ける如き易姓革命は存せず、復古が常に維新を意味してゐる。主體の根底にはそれがそこへ自身否定することによつて初めて眞實に自己を生かし得る限りなきものゝ一貫があつた。それが日本精神に於ける眞なる主體を超へた世界性の原理である。從つて皇道の發揮と云ひ八紘一宇と云ひそれは日本を主體化することであつてはならない。皇道は世界形成の原理でなければならぬ。日本を主體化することはその新道化を意味する。我々の東亞の新建設はこの方面に進むことは出來ない。何となればそれは同時に日本精神の自己喪失を意味するからである。

× ×

日本精神とは何ぞや？今日切實に要求せられてゐるこの問題の解答は何よりも一面性、偏倚性、淺薄性を警戒しなければならない、それは科學の脚光の下に正確に照し出された根本的檢討の結果でなければならぬ。このことは特に日本精神そのものゝ一つの特質であることは言はれるその重層的性格に根本的に基づいてゐるものである。けれども。正しい國民的實踐はたゞこの問題の眞の解決を前提としてのみ行はれ得べきであると言はねばならぬ。

（越智　弘）

文部省教學局推薦圖書

左記圖書は教職員、師範學校上級生徒、高等專門學校以上の學生生徒に適する圖書として去る七月文部省教學局より發表されたるものである。

柳田國男著　**國語の將來**　昭和一四、九、一五　四六版　四〇六頁　定價　一、五〇　創元社

武内義雄著　**論語之研究**　昭和一四、一、二七　菊判　三六二頁　定價　三、五〇　岩波書店

山田孝雄著　**五十音圖の歴史**　昭和一三、九、二五　菊判　二四四頁　定價　二、五〇　寶文館

大西克禮著　**風雅論**　昭和一五、五、四　菊判　三三一頁　定價　三、二〇　岩波書店

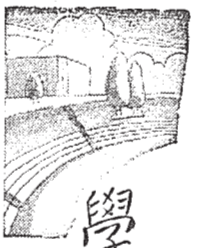
金倉圓照著　**印度古代精神史**　昭和一四、一、二六　菊判　四六六頁　定價　三、六〇　岩波書店

御歷代天皇の御追號讀法勅定

宮內省では紀元二千六百年の佳き年に際し、勅裁を仰ぎて御歷代天皇の御追號讀法を統一決定せられた。左の通りである。

天皇御追號讀法

第一代　神武天皇
第二代　綏靖天皇
第三代　安寧天皇
第四代　懿德天皇
第五代　孝昭天皇
第六代　孝安天皇
第七代　孝靈天皇
第八代　孝元天皇
第九代　開化天皇
第十代　崇神天皇
第十一代　垂仁天皇
第十二代　景行天皇
第十三代　成務天皇
第十四代　仲哀天皇
第十五代　應神天皇
第十六代　仁德天皇
第十七代　履中天皇
第十八代　反正天皇
第十九代　允恭天皇
第二十代　安康天皇
第二十一代　雄略天皇
第二十二代　清寧天皇
第二十三代　顯宗天皇
第二十四代　仁賢天皇
第二十五代　武烈天皇
第二十六代　繼體天皇
第二十七代　安閑天皇
第二十八代　宣化天皇
第二十九代　欽明天皇
第三十代　敏達天皇
第三十一代　用明天皇
第三十二代　崇峻天皇
第三十三代　推古天皇
第三十四代　舒明天皇
第三十五代　皇極天皇
第三十六代　孝德天皇
第三十七代　齊明天皇
第三十八代　天智天皇
第三十九代　弘文天皇
第四十代　天武天皇
第四十一代　持統天皇
第四十二代　文武天皇
第四十三代　元明天皇
第四十四代　元正天皇
第四十五代　聖武天皇
第四十六代　孝謙天皇
第四十七代　淳仁天皇
第四十八代　稱德天皇
第四十九代　光仁天皇
第五十代　桓武天皇
第五十一代　平城天皇
第五十二代　嵯峨天皇
第五十三代　淳和天皇
第五十四代　仁明天皇
第五十五代　文德天皇
第五十六代　清和天皇
第五十七代　陽成天皇
第五十八代　光孝天皇
第五十九代　宇多天皇
第六十代　醍醐天皇
第六十一代　朱雀天皇
第六十二代　村上天皇
第六十三代　冷泉天皇
第六十四代　圓融天皇
第六十五代　花山天皇
第六十六代　一條天皇
第六十七代　三條天皇
第六十八代　後一條天皇
第六十九代　後朱雀天皇
第七十代　後冷泉天皇
第七十一代　後三條天皇
第七十二代　白河天皇
第七十三代　堀河天皇
第七十四代　鳥羽天皇
第七十五代　崇德天皇
第七十六代　近衛天皇
第七十七代　後白河天皇
第七十八代　二條天皇
第七十九代　六條天皇
第八十代　高倉天皇
第八十一代　安德天皇
第八十二代　後鳥羽天皇
第八十三代　土御門天皇
第八十四代　順德天皇
第八十五代　仲恭天皇
第八十六代　後堀河天皇
第八十七代　四條天皇
第八十八代　後嵯峨天皇
第八十九代　後深草天皇
第九十代　龜山天皇
第九十一代　後宇多天皇
第九十二代　伏見天皇
第九十三代　後伏見天皇
第九十四代　後二條天皇
第九十五代　花園天皇
第九十六代　後醍醐天皇
第九十七代　後村上天皇
第九十八代　長慶天皇
第九十九代　後龜山天皇
第百代　後小松天皇
第百一代　稱光天皇
第百二代　後花園天皇
第百三代　後土御門天皇
第百四代　後柏原天皇
第百五代　後奈良天皇
第百六代　正親町天皇
第百七代　後陽成天皇
第百八代　後水尾天皇
第百九代　明正天皇
第百十代　後光明天皇
第百十一代　後西天皇
第百十二代　靈元天皇
第百十三代　東山天皇
第百十四代　中御門天皇
第百十五代　櫻町天皇
第百十六代　桃園天皇
第百十七代　後櫻町天皇
第百十八代　後桃園天皇
第百十九代　光格天皇
第百二十代　仁孝天皇
第百廿一代　孝明天皇
第百廿二代　明治天皇
第百廿三代　大正天皇



學內報

第二學期始業

第二學期授業は學部は九月十五日より、大學部豫科及び專門部第一部、第二部は同十一日より開始した。

勤勞奉仕

本年度學部の勤勞奉仕作業は去る九月十三、四の二間日神戸學長初め教職員、學生一同參加の下に千里山學舍校庭並に學舍附近の清掃手入を行つた。

興亞學生勤勞奉國隊歸學

七、八月の酷熱の候一ヶ月半に渉り北支奉獻の地に尊き汗の奉仕作業を通じて、興亞聖業の正しき認識を把握した學生勤勞奉國隊に參加の學部、豫科、專門部學生生徒十五名は、橋口教官引率の下に去る九月三日午後十一時大阪驛着列車にて無事歸阪した。而して尊き體驗の報告會は專門部一部は、九月十四日正午より天六學舍講堂に於て橋口教官並に參加專門部生徒の報告あり。學部及豫科は十六日午前十時半より大學豫科講堂に於て擧行した。

人事異動

依願解職（六月六日付）　二商教諭　中野聖
任二商教諭（七月二十五日付）　安田信一
依病休職（八月一日付）　書記　鳥山道雄
任關甲教諭（九月五日付）　安達金城
依願解職（同）　關甲教諭　塔本茂

前配屬將校　小林少將戰傷死

昭和十年より約二年間本學配屬將校として專門部に勤務された小林秋夫大佐は、北支戰線に於て○○部隊長として赫々たる武勳を樹てられたが、去る七月二十一日○○陸軍病院に於て名譽の戰傷死された。亨年五十四　曩き邊りでは陸軍少將に任じ、從四位に昇叙の御沙汰があつた。

少將は下關市豐浦五四七番地の出身にて、家庭には母堂すみ刀自とみち子夫人との間二男一女がある。

がくほう抄

▽河村信敦教授嚴父　河村信一教授の嚴父は去る七月三十五日住吉の自邸に於て八十五歳の高齢にて長逝された。

▽加藤教授嚴父　加藤金次郎教授嚴父は去る八月七日垂水の自邸に於て逝去された。

▽德尾俊彥教授　昭和十三年八月應召以來德島部隊長として篠山岡部隊に服務されてゐたが、このほど滿印國境監視の總務部長として赴任された。

▽賀屋俊雄氏（元教授）この九月佛印海防に在る中山重工業の總代理店中山洋行に赴任の豫定

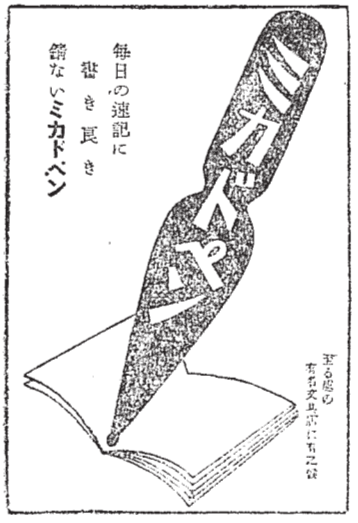
▽近藤英吉博士　講師として學部に於て債權各論を擔當せられてゐた京大教授法學博士近藤英吉氏は去る九月十四日東京康樂病院にて逝去された、亨年四十。

▽和田信夫氏　講師として學部に於て外國經濟事情を擔任せられてゐた朝日新聞社副主筆和田信夫氏は去る八月十七日御影の自邸で逝去せられた。亨年五十五。

▽瀧川正雄氏　專門部學生課勤務中、去る七月六日心臟麻痺にて急逝された。

故西田元亮君追悼演奏會　昨年八月北滿に於て戰病歿された昭和十三年學部政治科卒業の西田元亮君の追悼演奏會は千里山音樂部主催、校友會岸和田支部後援にて、去る七月二十一日岸和田市公會堂に於て開催、中村教授も出席すこぶる盛會であつた。

出征遺家族慰問の會　七月二十一日南海沿線淡輪寺學校に於て千里山音樂會主催の下に、同村出征遺家族の慰問會を開催、音樂演奏、滿鐵大阪支社の寫眞による映畫を上映し、所期の目的を遂した。



校友

× ×

校友會の新體制

去る九月九日（月）午後五時半より校友會常議員會を開催、校友會組織其他諸事業につき討議し校友會指導精神につきては更に檢討の上確立することゝし、先に決定したる紀元二千六百年紀念事業たる校友會館の建設は建設委員まで決定したるものゝ時局柄でもあり、主務省の方針に添ひ今迄に一般に寄附募集に取かゝることは見合せることゝした。而して新體制即座の諸事業につきても協議の結果、其の一と毎月一回、天六學舍集合室に於て時局其他の講演會を催すことゝし來る十月より實施の豫定である。

尙目下研究中の要項は來月號會誌に發表の筈である

支部設置

校友相集りて既に支部を結成してゐたのであるが、今度其の總會を開催し、又は設立届を提出されたのが左記三支部である。

一、西宮支部

設立年月日　昭和九年十月一日
役員　支部長　雜古貞雄
　　副支部長　丸木利喜造
　　同　志野覺治郎
事務所　西宮市六堰寺町六七、雜古貞雄方

一、上海支部

設立年月日　昭和十三年十月二十二日
役員　支部長　梶川多三郎
　　副支部長　辻野丈治
事務所　上海勞勃生路六四號、東亞製麻會社、梶川多三郎方

一、岸和田支部

設立年月日　昭和十五年一月一日
役員　支部長　辻野新一
　　幹事長　角野助之丞
事務所　岸和田市岸城町一八一二、辻野新一方

西宮支部總會

數年前より西宮在住校友有志相集りて西宮支部を結成してゐたが、相連絡をとりて集る機會殆どなく支部としての活動を停止した狀態であつたが、在住校友も多くなりて近接町村を加へると、三百名に上り、母校愛を熱心に說く同志、相集りて時は七月二十七日の眞夏の宵支部長雜古氏宅に於て總會を開催した。校友會本部より幹事角田好太郎氏、神屋敷學報局主任出席した。

先づ雜古貞雄氏より校友會支部結成以來の經過を報告し、將來は一致協力して支部の團結を固め、母校關西大學の發展を期したき旨の挨拶を述べて、會則を審議し、役員の選擧を行つた。

次で角田好太郎氏は支部設立の祝詞を述べて母校並に校友會の現況を報告し、支部長夫人の心盡しになる饗應にて祝杯を擧げ談ほ母校のこと、學友のことに終始し、母校の爲、支部發展の爲協力を誓ひて午後十時すき、母校關西大學並に校友會西宮支部の萬歲を三唱して散會した。

大陸の戰線より

北支宣撫官　昭七　專國　高津壯太郎

去る七月十四日、東北帝大出身高谷自衞團指導官の遺骨警護の爲、任地の隣縣○○に出かけたところ其處で會誌（國漢學會會誌）第二號を受領、久しぶりに母校の香にひたることが出來ました、私は恩師や學友の思出に新黃河畔の夜も知らぬ間にふけてゆきます。まさかの時にと拳銃や日本刀を用意こそして居れ、それが本來の工作用具でない私達の仕事、荒廢の中から自治制度を再興し產業機能を復活せしむる、政治、經濟的指導から救血宣撫の社會事業――それも內地あたりの夫れと違つてものすごくスケールの大きい工作を血まなぐさく硝煙くさいなかに、或るときは如意論觀世音の樣に、あるときは不動明王の樣に、どうにか努め得て此處一ヶ年、幸ひ無事で過ごして參りました、軍の討伐に隨行して五日、六日と水又水の中を支那馬に搖られながら特務工作に從事した處女宣撫時代から比べると此の頃は慣れたせいもあるのでせうが大分樂になりました。

刀や拳銃を帶びるのも月に二三度、後はボーイスカウトの制服や、完全非武裝の軍服でその日を送つてゐます。下略

北支○○部隊　昭十三專一商　福島正恒

拜啓初秋の候となり北支もめつきり涼しく朝々は頗に冷氣を感ずる次第です。先日はからずも校母卒業生にして北支にて活躍して居らるゝ人と相知り母校談に花が咲き一夜を語り明かした次第です。渡支以來一年半有餘母校の名に於ても大いに頑張る心算です。今度本部勤務も交代になつて中隊に歸る事になりました故お知らせします。

當日決定の新役員は次の通りである。

支部長　雑古貞雄
副支部長　丸木利喜造　志野覺治郎
幹事　喜多隆久　白長清一　佐々木勝也
天池茂　大西秀雄　丹羽政治郎　前田虎治
向井啓治　中津藤次郎　稜盛善祐　大壁信藏

當日の出席者

天池茂　大壁信藏
大西儀三郎　喜多正和
喜田隆久　稜盛善祐
佐々木高明　雑古貞雄
志野覺治郎　中津藤次郎
丹羽政治郎　西田久三郎
平野石雄　藤井武一
藤井忠夫　前田虎治
丸木利喜造　向井啓治
安川憲美

上海支部創立

我が上海支部は昭和十三年十月二十二日その發會式を擧げたが何分事變直後否事變中の爲多忙を極め報告が遲れましたが、大陸發展の基礎陣營として雄々しく關大校友結成の第一歩を踏みだした。支部長には東亞製麻株式會社の梶川氏を推し、各會員何れも大陸に力強く展びんとする壯者ばかりである。母校に關係ある者をも連結して三名の關甲卒業生が加はつてゐる。本年度は近日中に盛大な會合を催し上海同窓の意氣あある所を示すことになつてゐる。尚會員の顔ぶれは左の通りである。

(上)上海支部創立總會
(下)西宮支部總會

支部長　梶川多三郎(大七專)
副支部長　辻野文治(昭二專)
福富重治(昭二專)　細川末藏(昭九、學)
大野成孝(昭十三學)　平澤農一(昭十三專)
山本光雄(昭九學)　野村辰夫(昭十三專)
迫田良治(昭七專)　松山源三郎(昭七專)
佐藤長平(昭十專)
岡崎一雄(大十一專)
前川康治(昭十二專)
岸本毅(昭十二專)
吉田重敬(昭十五專)
高木鐵男(甲十一期)
堤上茂(甲十五)
北村修茂(甲十八)
會計庶務　西田竹雄(昭六學)

尚内地歸還、轉勤等の爲に上海を去つた諸君に學部卒業の大西常治郎、池北實、專門部卒業の大上司、近森學、鈴木義衛、横山森近誠、田中茂、山下正夫の諸氏がある。

朝鮮支部

八月例會

八月二日(金曜日)午後五時から京城府本町江戸川に於て八月例會を催し新會旗の入魂式祝宴の方法並基本金の處置につき協議し今回の企の成功を祝し益々本

北支〇〇部隊　專二法三年學　若野傳一

小生御蔭樣にて初めて迎へた大陸の炎熱にも打克つて張切つて居ります、こゝ山東の一角は御承知の如く年年のやうに物凄い惡疫の襲撃を受けまして我々皇軍にとつては討匪行ならぬ必死の防疫振りです、山東と申しましますと事變當所に絶對的な安定が施されたやうにお考へになるかもしれませんがなか〳〵、事變勃發以來四年を迎へた今日少し奥へ入れば匪團も散在する有樣でして事變解決の如何に困難なるかを我々こそ宣なるかなの感を深くします。

こちらの暑さは又格別でこの沿線では氷饅列車が運轉されてゐます、氷饅を額にした上客を見受けるのも又大陸の異風景です、交通の便も惠まれてゐますので慰問團も引切無しに來て下さり今更ながら皆樣の御熱誠に感謝の念で一杯です、先日も樂團の龍兒藤原義江氏一行が得意の音律に物を云はせさすがの荒武者をしばゝ〳〵グレートコンサート中のリスナーたらしめました、長期戰の段階に伴ひ愈よ國内の統制も徹底化され、益々緊張されてゐると云ふことを聞きましてその志氣愈よ昂揚するを覺へます、此の上は緊禪一番皆樣の御期待にお副ひ致したき念願のみでございます。

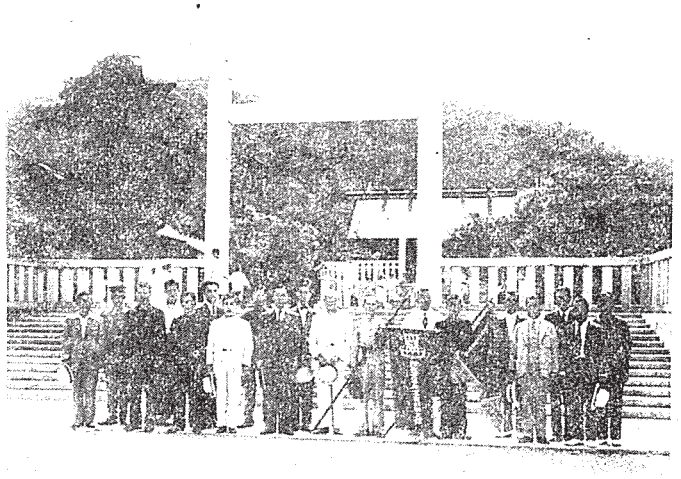
中支〇〇部隊　昭八　大法　阿部正貫

毎月御送附下さる學報は興味深く拜見してゐます、長い間論議ばかりされて一向に實を結びさうになかつた校友會が着々と目的に向つて統一されつゝありますことは皆樣方の御努力の跡も偲ばれて慶賀に堪えません、中支に迎へた三度目の夏の中で今年は一番身に應えました、然し秋風の起つのは内地よりか幾分か早く昨今は夕暮の涼味をさへ感ずる頃となりました、國内の狀勢も世界の動向も日增に緊迫の度を加へて參りましたが我等にとつては對峙してゐる支那軍の動きの方が身近な一大事のやうにさへ感ぜられます。

會の發展を計る事を誓ひ一同おなじみの江戸川自慢のうなぎ丼を會食して散會した。

會旗入魂式並祝宴

八月十二日（日曜日）午前九時朝鮮神宮に參集九時三十分奉贊殿に於て嚴に入魂式を行ひ一同神酒を戴き無事式を終り會旗を先頭に整列して神前に參拜記念撮影したる後自由に裏參道を歩きて祝宴場京城ホテルに向ふ、午前十一時過ぎ開宴松田顧問より皇紀二千六百年紀念事業の成功を祝して挨拶あり野田幹事より祝電披露（拍手）と基本金並會旗資金寄附募集につき經過報告をなし會食を取りつゝ懇談を重ね、午後一時一同起立太宰幹事の音頭にて關西大學の萬歳を三唱して散會した。



當日出席者

信田　芳　松田　清　太宰　明　野田　博
江藤　榮七　小松　勝馬　大川　正雄　田中　豐次
木原　安彦　岡野　一郎　飯田　守　石崎　儀二
黒田　一男　藤山　正己　川島　通利　李　範鎬
濱谷伊勢太　太平　威治　宮川三郎

基本金並會旗資金寄附

一、金百五拾圓宛
松本　正寛　信田　芳　岡本　至德　崔　鎭
松田　清　吉田平治郎　末廣　清吉　松村　作二
太宰　明　寺川　三藏　野田　博
一、金百圓宛　高橋　伊平　三上　吉隆　伊藤　國雄
一、金參拾圓宛　山田　謙男　小松　勝馬
一、金貳拾圓　江藤　榮七
一、金拾圓宛
井内源次郎　田中　豐次　秋山　雪大　曾根　三郎
吉繼　忠雄　岡野　一郎　尾原　東灰　石崎　儀二
一、金五圓宛
金　昌　健　篠原　公生　李　範鎬　濱谷伊勢次
合計金　貳千四百貳拾五圓也
（第二回發表の分記載もれ――學報係）

大連支部

秀麗會　六月二十日於海務協會

秀麗會も回を重ねる事五十、この記念すべき會場に偶々シーメンスクラブの一室が當てられたのだから不思議なものだ、數へてみると前後三十回は此處で御厄介になつてゐる、あとの數ケ所は或ひは幽邊限りなき山麓の茶亭もあつたし、一望千里の波濤を望得る絶景の料亭或ひは極く質素に會員の御家庭をお借りしたこと

中支○○部隊　昭十一卒二法　藤城勳

應召以來頗る元氣にて去る○月中支の戰線に立つを得ました、此處警備地○○攻略戰に於ける要衝にて破壞の跡の城門、城壁、秋蟲すだく廢屋にも往古の繁榮がしのばれます、大陸だけあつて相當異つて風物に接します、やけつくやうな日中もすぎ、やがて初夏より秋への氣候が一日中に現れます、しかし此處當分は未だ八月だと云ふに晩秋のやうに涼しく夜明け前等冬外套を着用して歩哨に立つてもまださむい位です、大陸に來てしみ〴〵わかつた事は我皇國の有難さと、戰には必ず勝たねばならぬと云ふことでした、心は關大魂を發揮して幾多の先輩に負けぬ働きを致す覺悟です。

中支○○部隊　昭十　大經　筒井淳造

以御陰小生も益々元氣にて最前線に在り御奉公申上居候、陳者先日は學報七月號慰送附賜はり母校の近況偲しく隅から隅まで拜讀仕候、誠に戰線にては何よりの慰みにて毎號御送附下さる日を鶴首致居次第有之候

昭和十五年八月十二日

中支○○部隊　昭八卒二法　昭十二大法　石原小四郎

母校の便りを知ることは戰地にあるもの丶最も嬉しきことにて是非よろしく願上げます、諸先生、諸兄の御健康を祈上げます。

南支○○部隊　昭十一卒二法　梅本林太郎

出征以來滿二年有餘ヶ月を隔する今日迄微傷だにせず相變らず御奉公申上居候

支那も此處まで來ると凡そ文化とは縁の遠い環境となります一方には戰火をかまへ又一面には地區の更生を企圖しての宣撫指導で任重くして道遠しの感があります、一度汽車に乘つて見たいと子供のやうな夢を畫いてゐます、蚊に攻められるので之にて失礼します。

ともあつた。しかしこゝは花火線香の樣な華やかさもなく一脈の淡さを感じ得る感傷もないが誠に氣輕に、低廉に朗らかにそして落付いて集れるのはこのハウスの持ち味とでも云ふべきか、會の永續性と大衆性を希ふ幹部の心意氣が映じてかこのハウスにただよつてゐる雰圍氣と集る吾々の氣持とが案外マツチしてゐるのが又不思議である。

今席は折悪しく日本酒の用意がないので室山老に又々御心配をかけ申したが洋食のスピード御馳走ではゆつくり召上る事も出來なかつたかもしれない。然しお話は淀みなく續いて樂しき事限りなし、住みなれた大連汽船の後に、誕生した許りの關賓聯入りの秀島幹事入社の挨拶に將來の抱負を述べられるあたりまだ〳〵青年の意氣失せず、特に前途を祝福したい、次に片岡君たつて子賓部隊十ヶ年計畫論に蘊蓄を傾け第二世をして母校に遊學せしめたいとは成る程遠大なる御計畫ではある、次に久々の岡田老たつて挨拶あり、放談例によつて縱横、いゝ氣分で學歌齊唱解散したのが九時半過ぎ

當日の出席者

室山　岡田　川野　伊達　岩本　秀島　平井　片岡
賀來　三栖　萩原　北條　池内　松田　竹若

秀麗會臨時總會　七月二十一日於南華園

七月二十日の第五十一回例會を一日延ばして二十一日一日に臨時總會として、忠魂鎭まり給ふ中央公園内の南華園で開いた日曜日でもあるし定刻よりも早く三々五々、市中とは思はれぬ閑靜なこの小亭に一ヶ月振りの特種を繰ひろげたから或は散策に或は鳥鷄戰に勢揃を待つ。愈て午後七時一同打揃つたので平井幹事立つて開會を宣し臨時總會の議題に移る。先づ第一に會則の變更即ち大連支部を關東州支部に擴大第一條、第八條、第九條、第十一條、第十二條に夫々一部訂正を行ひ、滿場一致を以つて可決。

次に本年今月が偶々支部創立十五周年に當るを以つて終始會の爲に盡力、其の功績尠なからざる、高濱、飯田、室山、守谷、岡田の五氏に對し高濱支部長より記念品を贈り一同感謝御禮の辭を申上げた、次に平井幹事の緊急動議あつて大連支部が關東州支部に擴大された今日幹事一名增員の件提議され滿場一致を以つて竹若君が新幹事となつた、終つて「創立時代の想出を語る」で時の過るのも打忘れて語りに語つた。時間が來たので學歌を齊唱して散會したのが丁度九時半。

當日の出席者

高濱　直一　室山宇太郎　守谷　賢治　高木嘉一郎
秀島　金治　川野　勳平　辻　菊雄　萩原　博
北條　茂義　西本　營兒　片岡　幸三　池内　輝一
武笠　幹雄　吉村　清一　平井　三郎　竹若　隆三

母校學生鮮滿經濟施計調査團來連

八月六日於海務協會

八月六日午後一時三十分の急行で母校學生六名が來ると云ふので平井、吉村、寺田、竹若の諸君が取敢へず大連驛まで出迎へた、學生諸君は至つて元氣、ひと先錦水旅館に落付いた後六時からシーメンスクラブで開催の吾々の歡迎會に出席してくれた。歡迎會には偶々北滿國境に向ふと云ふ川島、佐々木の兩見習士官の來場を得たので吾々としては嬉しさの二重奏と云ふわけであつた、會は兵隊、學生さんの挨拶から始まり、地元先輩諸兄は各自專門の立場から複雜なる經濟社會を先腐なき迄説き盡した、高濱老の過去數十年の體驗より得たる經濟理論は亜居る若人に多大の感銘を與へ伊達君又獨自の關稅問題から漫談に及び、秀島君は日本と關東州、關東州と滿洲の貿易相關々係を縷々説明、竹若君の大陸は仰ぐ勞力問題は若い人達にも良き參考にたつたであらう。亜にも角にも出席者全部は何らかをしやべらされた、最後に平井君立つて母校と大陸學生と大陸其の他に付種々日頃抱懷せる信念を吐露したが、遲來のお客樣は心よく終始熱心に質問等なされ當支部の氣持もわかつてくれた事と思ふ。終りに學歌高唱などやかに散會したのが十時半。

當日の出席者

お客樣側　川島　佐々木兩士官　小野元亮　石田久一
　　津垣直治　福谷長治　濱田利雄　小林淳次

高濱　吉村　伊達　秀島　川野　萩原　台村　寺田
平井　竹若

基本金寄附者芳名

一、金壹百圓也　高木嘉一郎
一、金五拾圓也　中村景太郎
一、金五拾圓也　川野勳平
一、金貳拾圓也　伊達弘

新京支部

六月例會

六月廿九日土曜日午後六時より何時もの青葉グリルで國都會第拾參回六月例會を開催した。

大同學院の校友は、金滿視察旅行の途にあり、大山建大教授は折悪しく所用で出席を御願ひすることが出來なかつたが、關節炎で三ヶ餘の病院生活を過し、退院後間も無い村上伊三雄君が不自由な足を引いて出席して呉れたことは校友一同大いに感激し同君の愛校心に意を強ふしたものである。

幹事より國都會も今回で一週年を迎へた報告があり節米でパン食に御神酒が廻り始めると、足は痛んでも元氣溌溌の村上君、計らずも成德館で汗臭い柔道着を脱ぎ合つて練習した藤田君との八年振りの邂逅に、嬉びと懐日時代の想ひ出話に花を咲かせる。夏の高粱大會の想ひ出やら豫科時代の無軌道振りの盛んなる御披露等あり二人して話題を掘潛つた感があり、佐藤孝

君志岐君あたりから茶を入れられたりして、愉快なこと可時も變らず、例會の雰圍氣をかもし十時閉店を合圖に盛會裡に校歌を放歌して散會した。

當日の出席者

三原　隆輔　今村　茂　藤田　藤一　邑岡　亮
村上伊三雄　佐藤　孝智　志岐　五六　佐藤　丈夫

七月例會

七月廿七日、清涼の地南湖に第拾四回「國都」例會の野遊會を開催した。生きた雞を持參して與のまゝ自慢の庖丁を振はうと主張した野蠻人もあたが、結局滿人市場で豚肉塊を二貫目其の他を仕入れ料理場を三原さんのお宅に御願ひし、玉原夫人の助力を仰いで午後六時手押の千寺車に珍料理を滿載して南湖に急ぐ。料理に手間どつた爲、五時の集合がはるかに過きて、參集の校友首を長ふ唾をかみしめて待つて〳〵御座つた。

南湖の湖を臨み二基の豚ナベを圍み豪華な夜宴を張る、月の無いのがもの足らず、統制品のビールが不足で酔も統制された形だが、和氣藹々たる氣分は閑ものはるかに統制の外にあり、校友始めは食ひ、終りは歌ひ、南湖に阿修羅おどりを展開した。闇の南湖に當夜ひねくつた名句を御披露する。

名月や南湖のほとり月を待つ　大山
名月やいまだ地平の底にあり　藤田
くらがりに何を食うやら月を待つ　三原
鬼おどり南湖のやみに國都會　竹内
くらがりに惣か南瓜の國都會　五六

午後十時、さしもの勇士も參つて、一同起立校歌を高唱して散會した。猶當日の出席者は

大山　彦一　同　滿　三原　隆輔　大道　重治
村上伊三雄　今村　茂　藤田　藤一　光田　健一
太郎良松美　佐藤　孝智　志岐　五六　北川源久雄
桑島　良信　江崎　基　下原　太郎　佐藤　丈夫

清和會

橋本利八君榮轉祝賀懇話會

大正十四年度專門部法經商卒業生を以て組織し、創立以來十數年終始一貫して會のために努力され、比類なき名幹事の名を檀にされる安田清治郎氏を筆頭に實業界稀に見る人格者前川信之助氏亜に法曹界の中堅小谷勇雄氏を幹事に配する清和會は、七月二十三日午後五時より野田屋に於て大藏省主稅局より鹿兒島稅關長に榮轉される會員橋本利八氏の祝賀懇話會を開催した

當日折柄の防空演習中にも不拘定刻までに左記の通り十七名の顔が揃ひ、橋本氏を主賓として時局に相應した簡素な晩餐を共にした。テーブルスピーチに入つて安田幹事橋本氏の榮轉祝賀の意を金員代表して述べるや、橋本氏立つて謝辭を述べ、續いて學生時代の懷舊談に花が咲き十數年前の金ボタン時代に思を寄せたかくて午後八時和氣藹々裡に閉會し、國運隆昌を祈念しつゝ警報管制下のブラックアウトを力强く踏みしめながら一同歸路についた。當日出席者左の如し。

主賓　橋本利八君
同窓外會同友人　大阪地方判事　伊藤一夫
大阪稅關會計課長　白石藤三
大阪稅關秘書係長　淺谷正一
大阪稅關　鶴川寛象
大阪稅關　中村孫一郎
上　井　軒（辯護士）
石川友也（日本水産）
横田敬治（香山印刷所主）
深川　實（辯護士）
佐伯三郎（關大教授）
森川太郎（關大教授）
田村修輔（日本油脂グリセリン）
關根進之亟（辯護士）
安富　敬（辯護士）
○安田清治郎（辯護士）
○前川信之助（松下電器貿易專務）
○小谷勇雄（辯護士）
○印世話幹事

會員消息

今井　正男君（大十五專商）　北區堂島北町二七に轉居
阿部彦太郎事務所　堂島貢通二ノ七に勤務
池本鶴太郎君（昭二　大法）　警部補・警察部保安課に勤務中の處此度辭任
井村　虎夫君（昭四　專法）　住吉區田辺本町六ノ九に轉居
泉本　正隆君（昭七專法　昭十大法）　警部補、今宮署より福島署へ
井川　升榮君（昭八　大商）　造幣局熊本出張所より大阪造幣局地金課に轉勤
伊藤　一雄君（昭八專一法）　兵庫縣武庫郡魚崎町横屋宮本五二二に轉居
家村　鳥彦君（昭八專二法）　福岡縣嘉穂郡柏屋町寮生
池原　正巳君（昭七專法　昭十大法）　昨夏應召中の處召集解除となり、大阪府警察部特高課複關係に勤務さる
池本　忠雄君（昭十專二法）　警部補、岸和田署より築港署へ轉任
岩出　勇君（昭十一專二商）　雪本と改姓、泉南郡春木町磯上大道町五六八に轉居
入交　好實君（昭十二大法）　召集解除となり歸還、住所は高知市藥屋敷三一
稲葉　通春君（昭十五專一商）　東京市板橋區九ノ二三〇七、常盤莊に轉居
植原　矢直君（昭五　大法）　阪本と改姓、西成區柳通一ノ一五に於て辯理士開業中
内田　武巳君（昭八專二法）　住吉區濱口町四四二に轉居、現在東光電機會社支配人
上田　茂君（昭十二專二法）　兵庫縣赤穗郡相生町南本町一丁目に轉居

江崎　基君(昭十五大商)　住所新京特別市崇智路三
○二號谷村方、勤務滿洲國經濟部本部
織田佐代治君(大十四大法)　警部、大阪府監察係長、
このほど堺警察署長代理を兼任さる
大西　秀治君(昭四　專法)　大阪市役所經理部に勤務
大田　義三君(昭八專一法)　上海黃浦路一七號アスタ
ーハウス内中華樟腦會社に入社
織田　友治君(昭八專二商)　昨年八月應召出征、本年
六月十九日南支の戰線に於て壯烈なる戰死を遂げ
らる、遺族　泉南郡佐野町上地藏町妻やす子氏
多田　米藏君(昭九專二商大法)　召集解除されて住吉區阪
南町西六ノ一に住居
岡田　雅一君(昭九專二商)　東京市中野區大和町五五
九、森野方、東京工業會社に勤む
折島　彰君(昭十專二商)　神戸市灘區高羽楠丘一八
に轉居、東亞海運神戸支店に勤む
尾崎　幸一君(昭十一專二法)　警部補、築港署より警務
課へ
大山　栗夫君(昭十五專二經)　兵庫縣武庫郡鳴尾村甲子
園庭球寮小別館に轉居
川船　勝博君(昭六　專法)　千代田生命福岡支部に轉勤
川越　茂樹君(昭十四專二法)　蒙古聯合自治政大同晉北政
廳より大同炭鑛會社に轉勤、總務部勞務科勤務、
住所は蒙疆大同縣平旺村大同炭鑛社宅七號
神田　孝助君(昭十一專二商大經)　東區今橋二ノ一九、不動
產商事會社機械部に入社
香山　俊夫君(昭十二專二經)　此花區恩貴島北之町一九
四、大阪住友病院に勤務
金子　典君(昭十四專二法)　神戸市灘區岩屋北町三丁
目、鐵道官舍六號
川上　道雄君(昭十五大法)　北滿北安省北安街北黑ホ
テル

河副　一雄君(昭十五專二商)　大連市榮町三五、齊藤公
司に在勤
北本常三郎君(明三十七法)　大審院判事たりし處去る
七月二十八日逝去、遺族は東京市本郷區駒込千駄
木町五二、嗣子北本治氏
金　壽　三君(昭三專一法)　姓を金光と改む
木下　善平君(昭九專文大法)　東淀川區十三東之町四ノ
二七
木村　信雄君(昭十　大法)　警部補、朝日橋署より泉
尾署へ
黑田代次郎君(明三十五法)　去る七月十四日逝去さる
遺族、池田市北今在家町四五一ノ二七、嗣子、德
衛氏
黑　才　實君(大十三專法)　東京市世田谷區東玉川町
二二、勤務は電氣協會電器試驗業務部
黑坂　嘉德君(大十五大法)　神戸市須磨區板宿町三ノ
二七
葛原　三二君(昭四　大法)　青森縣三本木軍馬補充部
より東京軍馬補充部へ轉勤、住所、東京市牛込區
餘丁町七三
古谷　正慶君(昭四　專商)　中華民國北京内六區南池
子大街二九、大林組北京支店に勤む
小谷　鹿松君(昭七專二國)　住所住吉區天王寺町三二
七三、勤務大阪府農會
高巳　玉君(昭十專二法)　高巳玉信と改む、住所は
北區神山町一ノ一
國府寺辰美君(昭十三專一法)　滿洲國齊々哈爾市中央廣
場一號、大阪朝日新聞社齊々哈爾支局に勤務
佐藤　禮三君(大十　專法)　日本生命保險會社庶務課長
澤村　英雄君(昭八專二商)　神戸地方裁判所より松山
地方裁判所に轉勤
蔡　龍　梁君(昭九專一法)　平壤と改姓、濟州法院支
廳檢事分局に勤務

澤野　實君(昭十專二經)　京都市左京區白川別當町
五九に轉居
佐野　辰二君(昭十三專二商)　住吉區墨江中五丁二一に
轉居
島瀨　義信君(昭九　專英)　東區北久太郎町三丁目、
日本ス・フ製品會社に勤む
島津　德三君(昭十三專二商)　住吉區役所戸籍係長、大
阪市主事に任す
島田　浩二君(昭十五專二經)　北河内郡守口町京阪本通
朱雀莊アパートに轉居
祐保　吉次君(昭十二大法)　神戸三宮警察署より長田
警察署經濟保安係に轉勤
鈴木　敏夫君(昭十四專二法)　天津特別三區八經路一、
天津利中製酸廠股份有限公司勤務
陵河　清君(昭十四專二法)　東京市日本橋區吳服橋一
ノ三ノ三、鹿島組大郎方に轉居
田中　西藏君(大十　專法)　元文部大臣祕書たりし氏
は内務大臣祕書官に任ぜらる
田中　義一君(大十五大商)　朝鮮郡山府金州通三四に
轉居
田川　茂君(大十五專經)　淵本市紺屋町に轉居
立石　晴男君(昭七　大經)　警部補、芦原署より府保
安課へ
竹森　哲二君(昭十二專二法)　北河内郡守口町日向町五
○六、東洋纖維化工取締役社長、竹森商店ゴム部
經營
田中　彰君(昭十二專二法)　召集解除となり東區安土
町、ジャパン、ツーリストビユローに勤務
高野辰一郎君(昭十四大法)　中部第三十一部隊に入營
豐岡　正忠君(昭十二專二法)　天津日本租界、英蓉街四
ノ一加藤物產會社天津支店

學生彙報

法理研究會

法理研究會は專門部二部法科生を以て組織し、學生が教室にて學び難きところの法學の綜合的、演習的、實踐研究を爲すと共に法科全學生の親睦を計るを目的とする。今や創立一年を經、且各研究會がその合同をより强化ならしめ學聯としての活動に前進せんとするとき、我法理研究會の地位並に使命は益々重要なる意義を持つて來たのである。本年度に入り機關紙發行、研究討論會、講演會の開催を爲しつゝ着々と事業の充實振を示してゐる。

本夏奈良公園にて綜林討論會を開催した。集る者二十數名、古都奈良公園の書苑に座し大樹の陰に涼風を受けて眞摯なる討論が交はされた。演題は左の如し

一、法の時代順應性について

一、經濟統制を論ず

千里山講演部

北陸北海道地方遊說

昭和拾五年度夏季遊說隊は部長岩崎教授引率の下に部員四名、七月二十七富山を振出しに青森、小樽、釧路と「激動期の世界と日本」の講演會を開催、學生部員は文化外交、經濟、政治上より自己の見解を披瀝し最後に岩崎教授が綜合的に世界と日本の情勢を究明講演部始まつて以來の盛大さを以て終了した。青森市に於ては當市開闢以來の來聽者で實に一千名以上に達した。別に二ケ所に於て座談會開催す。

七月廿七日　富山市に於ける講演會は校友會富山支部、大阪毎日新聞社富山支局、興國青年同盟、富山此年團後援の下に開催、定刻七時既に會場は滿員の盛況來賓として富山縣知事矢野第三關下を始め各新聞社、各種團體、富山、石川縣校友先輩の御來場あり、先づ豫科部員坂本長生君は文化方面より世界を眺め豫科生らしき意氣の熱辯を振ひ聽衆に多大の感心をそゝり、續いて學部法律學科一年の入田順雄君が、昨年北支蒙疆視察によつて得た尊い體驗を通して語る英國宣教師のスパイ行爲、それを通じてのべたる大アジアを打つて一丸とする大アジア共同防衛圏問題更に話は南支政策へと時局打つてつけの問題をとり上げて同君特有の具體的話術を以て聽衆を魅了すれば、續く經濟學科三年の川合久男君はこれ又經濟方面より世界を眺め、更に省みて日本の狀勢を論じ、統制經濟の長所弱點を突込み、戰時經濟の態樣を說明し、更に話題を轉じて新體制樹立に話を及ぼし、拍手を浴びて退場す、次は同じく經濟學科三年の足立己喜夫君が話題を政治にとり、個人主義、階級主義、全體主義としかして我國獨特の政治形體について話を進め新黨運動の動向より近衛內閣の前途に思彈なき意見を展開し、新政治體制の完全なる樹立を切望して止まないと結べば、滿場の拍手鳴を起り、若き學徒の雄叫びに會場は感激の增潮と化す、愈々最後に部長岩崎卯一教授が激動期の世界と日本について思想方面より專門的見解を披瀝せられる、民主々義、共產主義、全體主義と思想轉變した、然らば日本は今日如何なる思想の流れに洗はれてゐるか、民主々義に非ず、全體主義に非ず、ましてや共產主義に非ず、日本には三千年來傳はる所の八紘一宇の精神が、依然として今日發現されつゝあるのである、新體制の樹立もこの點に意義を見出し得るのであると、二時間餘に亘り非常なる雄辯を以て話をされば、聽衆只感激しばし拍手するを忘れたるかの如くであつた、十時終了の豫定が延びること約一時間、閉會の最後の一語が終る迄立錐の餘地なきまで聽衆は一人も歸る者はなく中には熱心に筆記してゐる者が多くあつた。

最後に遊說を非常なる盛況裡に終了し得たのは學校當局、校友、先輩諸兄の御後援の賜と謹んで御禮申し上ます。

プログラム

世界文化の變貌　大學豫科　坂本長生

外交上より見たる世界と日本　法文學部　入田順雄

經濟上より見たる世界と日本　經商學部　川合久男

政治上より見たる世界と日本　同　足立己喜夫

激動期の世界と日本　教授部長　岩崎卯一　先生

航空部

日本グライダーの聖地、清澄の氣滿ちる海拔五千尺の信州霧ケ峯高原に於て七月十一日より一ケ月に亘つて行はれた日本學生航空聯盟のグライダー合宿訓練に吾が關大航空部より山村一級潛空士（學部）以下九名が參加、高山植物亂れ咲く綠の大草原、碧空の下に銀翼に金精魂を打ち込んで心身鍛練に、又技術向上に精進し、後期以上の成果を收め得た。

第三回全日本學生グライダー競技大會は右訓練中、七月二十六日より三日間、最くも東久邇大將宮殿下をはるばる霧ケ峯高原にお迎へして紺青の天空を競ふ雄大な日本アルプスの峯々を背景に空の若人の熱戰を展開した。

本競技には本學よりグライダー飛行機三號競技に山村（學部）セルフスタート、シュックコード競技八班に金井、馬しく、B班に一山（以上專門部）の三名が出場より、力戰して豫選は三名共落ちパス、決勝に於て金井奮闘し三等に入賞、山村、一山は惜しくも六等となり長蛇を逸す。

お知らせ

學報も用紙の節約を實行して、表紙を賜し、頁數を減じましたが、行數をふやして掲載量の減少を補ふやう力めました。紙質も從來より落しましたがこれも國策順應の爲ですから御諒承願ひます。

學生欄の記事は「學生新聞」と重複するものがありますので、記事の統合を圖る爲め、今後は學生新聞に譲りますから御諒承下さい。

校友會費拂込者氏名（其の四）

一時拂（五拾圓）

山野井幸男

昭和十五、六、七年度會費（三ヶ年分）

吉岡　英一

昭和十五、六、年度會費（二ヶ年分）

源　友雄　濱崎　三郎　森本　定雄　鵜飼　九雄
今井　正男　堀　昇　濱口　尚

昭和十五年度會費（參圓）

下島　光　神保　敬男　飯田　清藏　山口　辰雄
馬野　治郎　日比野忠雄　井上　文夫　坂倉　廣顯
塔本　茂　菊池金次郎　神田　榮吉　國師　親德
引野　秀春　坂東　勇治　吉竹　利雄　草壁　武藏
山崎　敬義　笈西大次郎　牧　義作　安田千代太郎
福島　正二　池田　榮　大隅健一郎　入江眞太郎
大橋　光雄　嶋川　虎三　瀧谷　善一　中野　勝
長濱　政藏　山田　正三　松岡　孝見　葛原　三二
吉屋　美貴　神宅賀藏惠　河野　初市　高坂俊吉郎
赤石　信二　牧　聽二　末川　博　岡　一翠　原田　滿
中田　淳一　佐々木總一　村本　福松　堀　經夫　北川　正美
吉澤　義則　宮本　英雄　細江　逸記　中川市次郎　黑田代治郎
渡邊宗太郎　藤　榮　谷口　吉彦　末廣　重雄　岡　道固　吉岡　達男
隅山誠太郎　高橋　盛孝　安川安太郎　和田　盟二　原田　等
森川　大郎　中川甫太郎　片岡甚太郎　三枝樹正道　武田　晴夫
田邊信太郎　正井　敬次　矢口孝次郎　國藏　鼠臣　松芝　修
賀來　俊一　大小島眞二　岡本勝治郎　八島　治一　藥師寺鎭男
三谷　道麿　福島　四郎　所　眞　西田長左衛門　有田　米雄
後藤新之助　上道　直夫　鈴木　周作　黃　延　宮　藤塚　嘉治
一海　景雲　榮谷　忠治　小野木　龍　石濱純太郎　渡邊　能嚴
江馬　務　森　政道　高田　彬　坂本　憲三　羽賀　正典　森田　次郎
平林　治德　小山　慶作　佐伯　千仞　安田　信一　中島　國一　四井　義規
丸谷　喜市　金子又兵衛　魚澄惣五郎　丹羽　英夫　竹內虎次郎　守安富太郎
岡本　眞一　木村　續藏　木村　雄助　兒玉　善吉　北村勝三郎　藤師寺富美雄
大平　顯母　本莊鉄次郎　三谷　友吉　玉川　義隆　田村安二郎　森田耕太郎
安田　泰平　山本巳寅巳　前田　聽瑞　中村　簡吉　齋藤　湊　中村行己
服部英次郎　三木　治　本庄　實　北山　義衛　佐藤芳太郎　橫山正一
藤澤章次郎　西村嘉三郎　三木　純吉　安武千代吉　冷泉　宗祐　高濱直一
黑崎　暢男　熊宮　清一　三木甚太郎　名越　日月　廣野　完　立野　忠吾
中尾　謙吉　田邊　清市　坂部　正武　小村　雅彥　吉岡　榮八　小林益三郎
富田伸次郎　藤澤　安井　章吾　鈴木　宗廣　三木甚太郎　黑田健次郎　北佳三之助
黑田　甚一　今川　太郎　櫻井喜三次　樋口恒三郎　寺岡　秋男　竹內虎次郎
森下　政一　山田　秦三　今井卷太郎　阪下　德道　山路　光雄　北村勝三郎
脇田　道邦　山田　作間　耕逸　中村　守　藤師寺富美雄
馬淵　精　堀江　哲雄　村山　藤行
山內英二郎
吉岡　榮八
黑田健次郎
山路　光雄
中村　守

三瀨　光義　小山　龜雄　百木　惠一　吉田鹿之助　栗山　基一　船津　和夫　津川藤三郎　幸田　秀明
櫻井　善一　黑田　隆一　能本　良春　小崎　西郎　本田　猛　吉川　忠質　中島　常雄　森內　梅吉
鎭內正太郎　森　藏吉　樂原　義隆　後藤　種吉　米井　邦三　山崎　伊作　野崎　春夫　田中　英一
中村　毅　板垣　進吾　內藤　正知　山川源次郎　北木鶴市郎　守永　治　仲野　富祥　阪本　茂一
島井　利之　深川　重義　山川　三郎　吉田伊之助　小椋義三郎　牧原　福壽　三隅　正夫　坂口　亮人
三木　邦雄　鴻上　弘　森田　滿茂　富　眞吉　倉木　善夫　高濱　信男　伊東　眞造　中村八十一
橋本傳太郎　清原俊之助　山田　俊治　三宅　德雄　近藤　常吉　松田　武彥　森永　勝見　北岡　醇平
三浦　忠義　世瀨　定雄　久山千太郎　山岸源一郎　山名　育　小野　慶一　三宅　凡夫　黑川　重三
水田　猛男　安田　高雄　酒井　幹郎　脇本　三鹿　山形　秀春　三宗木勝平　赤井　常隆　深田素一郎
山根　榮弘　中川　政人　三島多壹雄　三宅信太郎　後藤　三郎　佐藤　宋雄　大幸　明　松井二三夫
藤本　梅一　西垣桂太郎　福田　榮芳　安井　立雄　山本　省三　藤井　保　原田市之進
清川　清　清成五六郎　濱田　次郎　米田　忠八　武內治一郎　藤田　義雄　齊藤　正美　北川　治
木村　太郎　白井　武彥　八田　讓　古賀　謙三　村上　義雄　藤本　政治　森脇　秀正　室山宇太郎
權田　皓　山口直三郎　安田　倫藏　近藤　賢次　八木龍二郎　茅原　宗平　堀江　貞看　北川　昇
內田　一穗　永田宗太郎　岡田　勇　木村　鶴策　貴村　一雄　村岡　俊三　廣瀨　義雄　森戶　武
野村　眞松　山內　義治　神屋敬民藏　烏賀陽然眞　武久　泰正　北木常三郎　小寺善之助　金　衛　中
鴨川靜太郎　森岡　正典　黑田　一男　甲斐　邊　山內　善二　北村　源平　溝口　義章
小林　功　安川勝太郎　吉川眞四郎　北村　泰之　矢吹　之孝　衣笠　千歲　山川　登
葛原　三二　岡田三四二　倉知　俊　栗本　義宣　森田鶴三郎　加來　茂彥　溝邊　文和
高坂俊吉郎　渡邊長三郎　毛谷村元治　森井　新　龍田　泰　長崎　政道　中谷　定治
原田　滿　佐奈　正雄　桑田龜之助　弓庭　元一　安永辰次郎　福田　曉　毛利　兼保　熊　謙二
北川　正美　森西　克己　寺島　由松　蠶住　豊吉　廣部古誠介　小平彥太郎　堀內　新一
黑田代治郎　柳川茂十郎　村上　博二　坂井　榮　小松　勝馬　有馬龍之助
吉岡　達男　藤田　和夫　三浦　信一　直吉己一郎　山路　岩雄　森內　純吾
武田　晴夫　渡邊　正人　佐藤　時　德田　高二　松田　清
松芝　修　渡邊　忠敦　三笠　稔　松村　作二　高橋　辰三　山本　萬藏
藥師寺鎭男　橋島　信一　小高　寬　小林　國藏　畢本錄太郎　山崎　義輝
渡邊　能嚴　行　後　喬　逢坂　勝見　李　日　岳　後藤卷太郎　吉田平治郎
森田　次郎　牧　光雄　依田　六郎　青木純一郎　向井　厥夫　吉田榮次郎
四井　義規　森田彥四郎　村上　善　中村　忠夫　八木　弘　蔡　友成
守安富太郎　森田耕太郎　金　一　瑞　佐藤　清　小谷　宮英　半田　誠治
有田　米雄　山本誠之助　橫山正一　山田榮次郎　我謝　孟廣　海東　茂雄
今泉　岩男　中村　行己　高濱　直一　笠原德二郎　上西　一義　江川傳次郎
藤塚　嘉治　立野　忠吾　北佳三之助　木村　清一　一瀨　義次
瀧　重　貞　小林益三郎　竹內虎次郎　櫻井嘉久藏　木藤　榮之　栗田　豐藏
平井　三郎　北村勝三郎　田村安二郎　稻垣　義男　陰山　昇　木村　富士
磯田　英夫　藤師寺富美雄　佐藤芳太郎　櫻本孝太郎　秋田　兼治　荒井　繁一
羽賀　正典　村山　藤行　池田　數好　伊藤　信一　新井　正雄
中島　國一　山內英二郎　冷泉　宗祐　石橋　政雄　井見　昌一　海老　政雄
三木甚太郎　吉岡　榮八　廣野　完　山田　大熊　櫻　爲一　安藤　雄　上田　隆行
三木甚太郎　黑田健次郎　寺岡　秋男　毛久保三平　木村　順一　大塚　諸人　鶴飼　正夫
阪下　德道　山路　光雄　樋口恒三郎　伊藤　潔　池田　蒲重　岩本　秀雄　上田榮治郎
櫻井喜三次　作間　耕逸　中村　守　大西　富平　池田　一郎　石田　稔
今井卷太郎　馬淵　精　堀江　哲雄　櫻本金太郎　泉崎　秀雄　木村繁太郎

（以下次號）

オトマアル・シユパン原著

關西大學教授 赤羽豊治郎邦譯

個人主義經濟學と全體主義經濟學

內容

一、はしがき
二、個人主義經濟學の批評
三、全體主義經濟學の概要
四、回顧

四六判並製
定價五拾錢
送料六錢

◇最新刊◇

著者は獨逸經濟學界に特異の地位を占むる一人であつて、氏の唱導せる全體主義の經濟理論はその社會理論とともにかの地に於ては學徒の共有財産となつてゐる。この成果をもつて著者はこれまでの個人主義經濟學を論難攻撃したため、遂に世人をして著者の學說全體の評價を誤らしめるに至つた。現在著者ほど否定せられ若くは肯定せられるものは少くまた氏を無視し得ない事情にある。本書は著者が一九二七年伯林シャーロッテンベルヒ高等工業學校に於てなした講演の筆記で有るが、著者の經濟理論の大要を說述して遺憾がない。

東亞新秩序建設と歐洲戰亂は今や世界を一つの大きな新秩序たらしめんとする時に當り著者の經濟理論の演ずる役割の大なるはこゝに說くまでもあるまい。

氏の經濟理論の特質を識る上に敢て本書の一讀を奬む。

ゾムバルト原著
宇治伊之助邦譯

國民經濟學と社會學

貳拾五錢
送料六錢

株式會社 大同書院

大阪北區梅田新道 振替大阪一五三番 電話北九一六七五五三二番

東京駿河臺中央大學前 振替東京八一二三八番 電話神田二二二八番